広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第59集

銭神第2・4・5号古墳発掘調査報告書

1987

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第59集
銭神第２・４・５号古墳発掘調査報告書正誤表

頁・行	誤	正
１５・１３	土師器杯があり。	土師器杯があり、

銭神第2・4・5号古墳発掘調査報告書

1987

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は，昭和61（1986）年度に，広島県企業局との委託契約によって財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した小原地区土地造成事業に係る銭神（ぜにがみ）第２・４・５号古墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの調査研究員梅本健治，恵谷泰典が実施した。

3．遺構の実測，写真撮影，出土遺物の整理・復元・実測・写真撮影及び図面の整図は上記の者が行い，本書の執筆・編集は梅本が行った。

4．本書に用いた方位はすべて磁北である。

5．第１図は，建設省国土地理院発行の１：25,000の地形図（三原，竹原）を使用した。

6．本古墳群の所在地は，三原市沼田西町惣定字銭神80－１番地であったが，小原地区土地造成事業の実施に伴い，昭和60（1985）年９月12日付けで同町小原字袖掛80－１番地に地番変更した。

7．本報告書のいっそうの理解のため，当センター刊行の『銭神第１・３号古墳発掘調査報告書』　昭和61（1986）年　を併読されたい。

三原市位置図（ドットは銭神古墳群を示す。）

目　　次

Ⅰ．はじめに……1

Ⅱ．位置と環境……2

Ⅲ．調査の概要……4

Ⅳ．遺構と遺物……6

Ⅴ．まとめ……41

挿図目次

第1図　古墳群周辺遺跡分布図（1：25,000）……3
第2図　古墳群周辺地形図（1：2,000）……5
第3図　古墳群遠景（南から）……5
第4図　古墳群地形測量図（1：400）……6
第5図　第2号古墳墳丘測量図（1：200）……7
第6図　第2号古墳近景（西南から）……7
第7図　第2号古墳石室実測図（1：60）……8
第8図　第2号古墳石室……9
第9図　第2号古墳石室……10
第10図　第2号古墳石室掘り方土層断面図（1：80）……11
第11図　第2号古墳調査風景（西から）……11
第12図　第2号古墳石室内遺物出土状況実測図（1：40）……12
第13図　第2号古墳土師器出土状況……12
第14図　第2号古墳出土遺物実測図（1）（1：3）……13
第15図　第2号古墳出土遺物……13
第16図　第2号古墳出土遺物実測図（2）（1：2）……14

第17図　第２号古墳出土遺物実測図（３）（１：２）……15
第18図　第２号古墳出土遺物……16
第19図　第４号古墳周溝土層断面図（１：80）……17
第20図　第４号古墳周溝土層断面及び調査風景……17
第21図　第３・４・５号古墳墳丘測量図（１：200）……18
第22図　第４号古墳石室実測図（１：60）……19
第23図　第４号古墳石室……20
第24図　第４号古墳石室……21
第25図　第４号古墳棺台石検出状況実測図（１：40）……22
第26図　第４号古墳出土遺物実測図（１：２）……23
第27図　第４号古墳出土遺物……23
第28図　第５号古墳近景（東から）……24
第29図　第５号古墳周溝・石室土層断面図（１：80）……25
第30図　第５号古墳石室……26
第31図　第５号古墳石室……27
第32図　第５号古墳石室実測図（１：60）……折込
第33図　第５号古墳石室……29
第34図　第５号古墳石室内遺物出土状況……30
第35図　第５号古墳石室内遺物出土状況実測図（１：40）……31
第36図　第５号古墳出土遺物実測図（１）（１：３）……31
第37図　第５号古墳出土遺物……31
第38図　第５号古墳石室内遺物出土状況……32
第39図　第５号古墳出土遺物実測図（２）（１：２）……33
第40図　第５号古墳出土遺物……33
第41図　第５号古墳周溝内遺物出土状況……34
第42図　第５号古墳出土遺物実測図（３）（１：３）……36
第43図　第５号古墳出土遺物……37
第44図　第５号古墳出土遺物実測図（４）（１：２）……38
第45図　第５号古墳出土遺物……38
第46図　第５号古墳出土遺物実測図（５）（１：２）……39
第47図　第５号古墳出土遺物……39

Ⅰ．はじめに

この発掘調査は，広島県企業局(以下「県企業局」という)が施行した小原地区土地造成事業に伴うものである。この事業は「三原新広域市町村圏振興計画」の一環として，三原市沼田西町小原地区一帯の丘陵部に小原地区工業団地を建設しようとするもので，昭和55～57（1980～1982）年に開発調査を進めてきた。また，昭和57（1982）年1月に広島県教育委員会（以下「県教委」という）に工事計画予定地内の文化財の有無について照会を行い，付近に存在する宮の谷第1～3号古墳及び江尻古墳群中の2基については，事業対象地から除外し現状保存とした。

昭和58（1983）年12月から1期工事が着工されたが，昭和59（1984）年11月工事中に銭神第1号古墳が発見されたため，県教委は再度分布調査を実施して銭神第3号古墳を確認した。2基の古墳は，昭和63～65（1988～1990）年に予定の2期工事予定地内に存在し，工事計画からみて現状保存が困難なため事前に発掘調査を実施して記録保存をはかることになった。このため財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）は県企業局から昭和59（1984）年11月に発掘調査の依頼を受けたが，センターでは昭和59（1984）年度事業はすでに実施しているため，次年度に実施し，報告書を刊行した。

ところで，銭神第1・3号古墳の発掘調査中に銭神第2・4・5号古墳の3基を発見したが，センターとしては昭和60（1985）年度事業をすでに実施しており，年度内の発掘調査は不可能であった。このため，県教委，県企業局及びセンターはこの取扱いについて協議し，昭和61（1986）年度に実施することになった。昭和61（1986）年4月，センターは県企業局と委託契約を締結し，4月7日から6月6日までの約2か月間発掘調査を実施した。また，5月24日，三原市教育委員会と共催で遺跡見学会を開催した。

本書は以上の経過を経て行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，また，この地域の歴史研究の一端を知る手がかりとして，昭和60(1985)年度刊行した銭神第1・3号古墳の調査報告書とともに少しでも寄与できれば幸いである。

なお，発掘調査にあたっては県教委の御指導を得るとともに，県企業局，三原市教育委員会及び地元住民の方々から多大な御協力を得て無事終了することができた。記して感謝の意を表したい。

Ⅱ. 位置と環境

銭神古墳群は，広島県東南部の瀬戸内海沿岸に位置する三原市西端，東流する沼田川南岸にひろがる標高100m前後の低丘陵のほぼ中央に所在する。この丘陵は，周囲を沼田川やその支流尾原川・天井川によって囲まれており，これら中心河川に流れ込む数多くの小河川によって南北に狭長な開析谷を形成している。これら開析谷には小原，松江，惣定などの集落が展開しており，開析谷を望む丘陵裾に横穴式石室墳をはじめとする遺跡が点在する。以下，この地域の主要な遺跡について，時代毎に概観して行きたい。

旧石器時代　三原市街地の沖合いに浮ぶ宿祢島では，掻器・剥片が採集されている。

縄文時代　三原市域を中心に早・後・晩期の土器や石器を出土する遺跡が知られており，早期の時貞遺跡，後期の片山遺跡，横見廃寺跡下層[1]，晩期初頭の貝持貝塚などがある。

弥生時代　沼田川が山間部から平野部に流れ込むあたりの両岸の丘陵上に該期の遺跡が存在する。北岸では後期の弥生土器の散布地である塔の岡遺跡，南岸で松江遺跡，陣べら遺跡群[2]，新庄庵遺跡群，板箭遺跡などがある。松江遺跡では磨製石庖丁が出土している。陣べら遺跡群は，弥生時代後期末～古墳時代初頭に属する住居跡や土坑墓・箱式石棺などの墳墓群の存在が注目される。

古墳時代　前半期の古墳は，主に沼田川を望む低丘陵上に営まれている。いずれも径10m程度の小円墳で，木棺や箱式石棺を内部主体とし，鉄器・鏡・玉類を副葬する。主なものとしては，宮の谷第1・8号古墳，馬場谷第2号古墳，福礼古墳[3]，江尻第1号古墳，鍛冶屋迫第4号古墳，兜山古墳，鳩岡古墳がある。このうち兜山古墳・鳩岡古墳は各々径45m，36.5mの県内でも最大級の円墳で，墳丘には円筒埴輪・葺石が廻っている。

後半期の古墳としては，6世紀後半以降，横穴式石室を内部主体とする古墳が築造される。これらは，丘陵頂部，丘陵斜面に築造されるものと，丘陵裾に築造されるものがある。前者として，朝武第1号古墳，天高第1号古墳[4]，溜箭古墳が，後者としては，藤谷古墳，岡の迫古墳，長古原第1号古墳，釜山大塚古墳，梅木平古墳，御年代古墳，貞丸第1・2号古墳などがある。銭神古墳群は，前者の範疇に入る。

古代以降　横見廃寺跡[5]は，白鳳期から奈良時代にかけての寺院跡で，近接する梅木平古墳や御年代古墳の被葬者との関連が考えられよう。

(註)

(1) 広島県教育委員会『安芸横見廃寺の調査Ⅰ』　昭和47 (1972) 年。

（2）陣べら遺跡群発掘調査団『陣べら遺跡群』　昭和46（1971）年。

（3）広島県教育委員会『福礼古墳発掘調査報告』　昭和48（1973）年。

（4）（財）広島県埋蔵文化財調査センター『天高第１号古墳』　昭和58（1983）年。

（5）広島県教育委員会『安芸横見廃寺の調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』　昭和47～49（1972～1974）年。

その他の遺跡については主に，福井万千「第二編　原始・古代編」「付編一　考古編」『三原市史』第一巻通史編一　昭和52（1977）年。を参照した。

第１図　古墳群周辺遺跡分布図（１：25,000）

1．銭神古墳群　2．福礼古墳　3．松江遺跡　4．板前遺跡　5．溜前古墳
6．朝武古墳群　7．藤谷古墳　8．岡の迫古墳　9．江尻古墳群　10．宮の谷古墳群
11．馬場谷古墳群　12．兜山古墳　13．鳴岡古墳

Ⅲ. 調査の概要

銭神古墳群は，三原市沼田西町大字小原字袖掛80－1に所在する横穴式石室を内部主体とする古墳5基で構成される古墳群である。

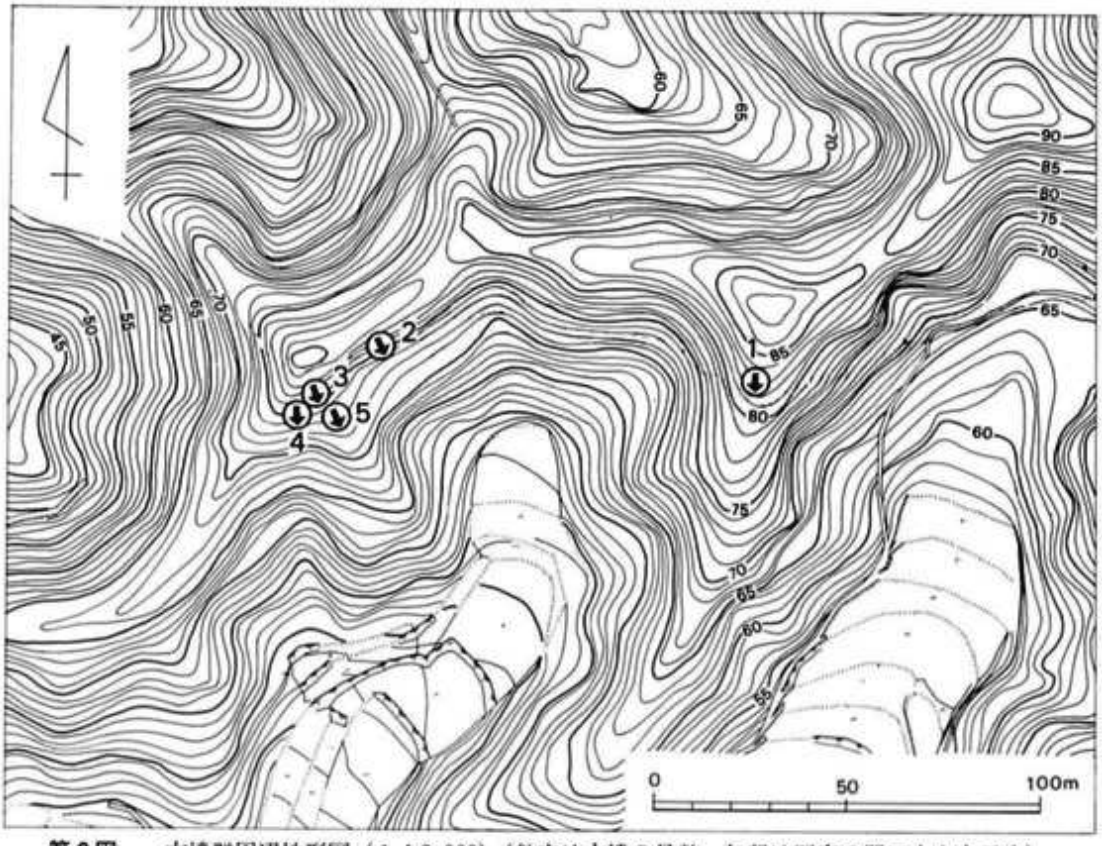
古墳群は沼田川南岸に展開する低丘陵地帯のほぼ中央，標高93m弱の山塊頂部からほぼ西方に細長くのびる尾根上及び丘頂をややさがった南斜面に立地する。眼下に，南流して天井川に注ぎ込む駒月川によって開析された谷平野を望み，水田からの比高は20mである。銭神古墳群はこのように，距離的には沼田川沿岸に近いが，石室はいずれも南に開口し，古墳群からは東流する沼田川支流天井川の流域を望むことができる。

5基の古墳は，東端の尾根上にやや孤立的に存在する第1号古墳と，この第1号古墳の西方約100 m離れて群在する第2～5号古墳に分けられる。また第3・5号古墳は尾根線上に，第2・4号古墳は尾根南斜面に立地する。なお，昭和60（1985）年度に第1・3号古墳の発掘調査を行い，報告書を刊行，本年度は第2・4・5号古墳の調査を行ったがこれら5基の概要についてはつぎの表のとおりである。

銭神古墳群一覧表

古墳No.	立地	標高	開口方向	石室規模	周溝	周溝の規模	石室石積みの仕方 左側壁	奥壁	右側壁	棺台石	鉄釘	出土遺物
1	尾根線上	81～85m	N13°E	長さ 3.9m 幅 1.0m～1.1m 高さ 1.0m	有	幅 0.5m～1m	A1 C / C	A2 / C	A1 C / B C	有	10本	土師器（甕）
2	尾根南斜面	74m	N12°W	長さ 3.8m 幅 1.12m 高さ 1.06m	不明	—	A1 B / B	A2 A / C	A1 / C	有	25本	土師器（杯） 須恵器（甕）
3	尾根線上	76～77m	N10°W	長さ 4.8m 幅 1.1m 高さ 1.5m	有	幅 1m 深さ 0.2m	A1 A2 / B C	A2 / A	A1 / C	有	26本以上	須恵器（高杯，台付長頸壺），刀子，刀子状鉄器，耳環
4	尾根南斜面	73～76m	N15°E	長さ3.09m 幅 0.85m 高さ1.08m	有	幅 0.7m 深さ0.08m	A B・C / B・C	A1 / B C	A1 C / B C	有	6本以上	（周溝内より3号墳からの転落による馬具片）
5	尾根線上	71～74m	N42°W	長さ4.31m 幅 1.30m～1.52m 高さ1.67m	有	幅 4.5m 深さ1.56m	A1 / C	A2 / C	A1 / B C	有	7本	須恵器（坩堝，杯身，甑，提瓶），耳環，鉄刀，鐙など。

※各記号は「Ⅴ まとめ」（P42）を参照。横線の上が基底石の，下がそれ以外の石積みの仕方を示す。



第2図　古墳群周辺地形図（1：2,000）（数字は古墳の号数，矢印は石室の開口方向を示す）

第3図　古墳群遠景（南から）

Ⅳ. 遺構と遺物

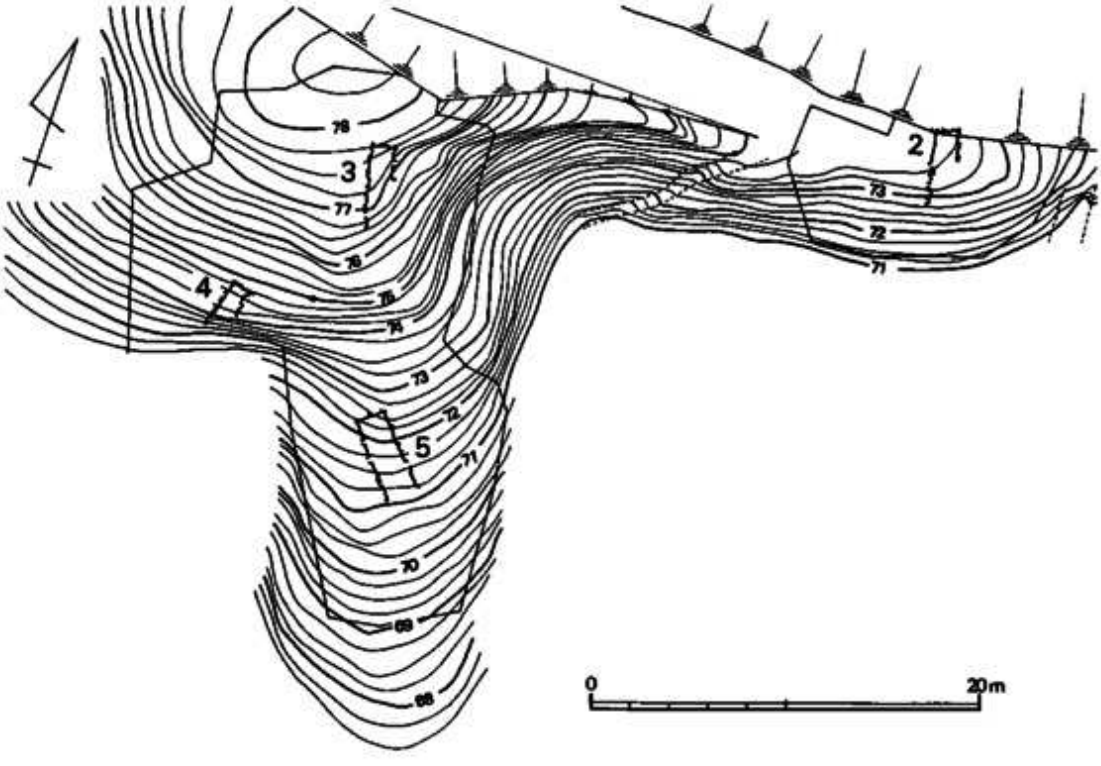
1．第2号古墳

(1) 立地（第4～6図）

本古墳は，第3号古墳の東方約30mの比較的急峻な尾根南斜面に立地する（標高74m）。内部主体は，ほぼ南方向（N12°W）に開口する無袖の横穴式石室である。また，墳丘や石室背後が削平されているため，盛土の状態や周溝の有無は不明であり，墳形や墳丘規模についても明確にしがたい。

(2) 石室（第7～10図）

石室掘り方は，奥壁部分が一部削平を受けており，規模は現状で長さ5.06m，幅3.50m，深さ1.10m，平面形は隅丸長方形である。石室は，この掘り方の東辺に寄せて構築されている。調査の時点で，すでに天井石すべてと，奥壁の上半は欠失しており，奥壁及び奥壁側の両側壁の基底石とこの基底石上1段分の石材を，入口側の西側壁は基底石だけを残す状態であった。なお，東側壁の入口側はすべて石材を抜きとられていた。石室の現存規模は，

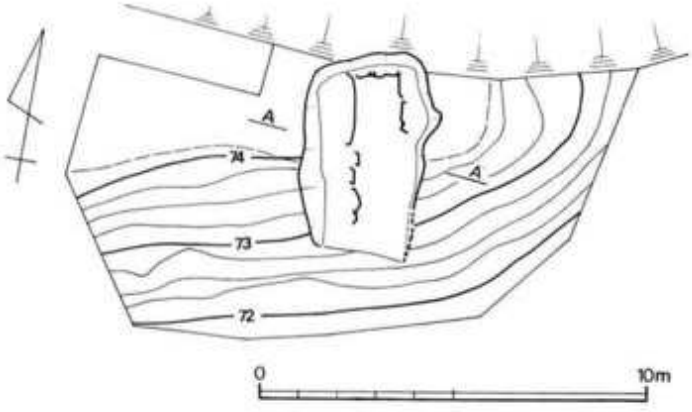


第4図　古墳群地形測量図（1：400）調査前

西側壁で長さ3.80m，奥壁で幅1.12m，西側壁の高さ1.06mである。

石材の積み方は，基底石については基本的に広口積みで，基底石上の石材については小口積みの方法をとっている。ただ，本古墳の石室の特徴としては，西側壁の入口側4個の基底石が小口積みであることであろう。次に，西側壁，奥壁，東側壁の順に石材の積み方についてやや詳細に述べてみよう。先ず，西側壁については，計5個の基底石と最奥部の長大な基底石上に1段分の石積みが残存している。基底石については欠失はない。ただし，最奥部の基底石と奥から2～5番目（つまり入口側）の基底石とは規模・積み方が異なる。最奥部の基底石は，奥壁や現存部分の東側壁の基底石同様，広口積みにしている。石材は，銭神古墳群でも最大規模のもので，98×182cm，厚さ60cmの長大な山石を横長に立てている。奥から2～5番目の基底石は，一辺60～80cm，厚さ20～30cmの不整形の山石を寝かせた状態にしている。一種の小口積みと考えられる。次に，最奥部の基底石上の石積みについては，基底石の上辺が水平でないため，奥壁側に下傾している部分に40×50cmの板石を乗せて高さを揃えたのちに，最小24×38cm，厚さ20cm，最大48×90cm，厚さ28cmの規模の長方形の石3個を，いずれも持送りぎみに小口積みしている。なお，西側壁の5個の基底石は，いずれも掘り方底面を最大10cm掘り凹めて安定を図っている。特に，最奥部の基底石については，基底石下の裏側と入口側の小口部分に20～40cm大の角礫数個を詰めている。

奥壁は，西側はやや小型の36×66cm，厚さ30cmの長方形の石を縦長に立て，東側はほぼ一辺80cm、厚さ60cmの分厚

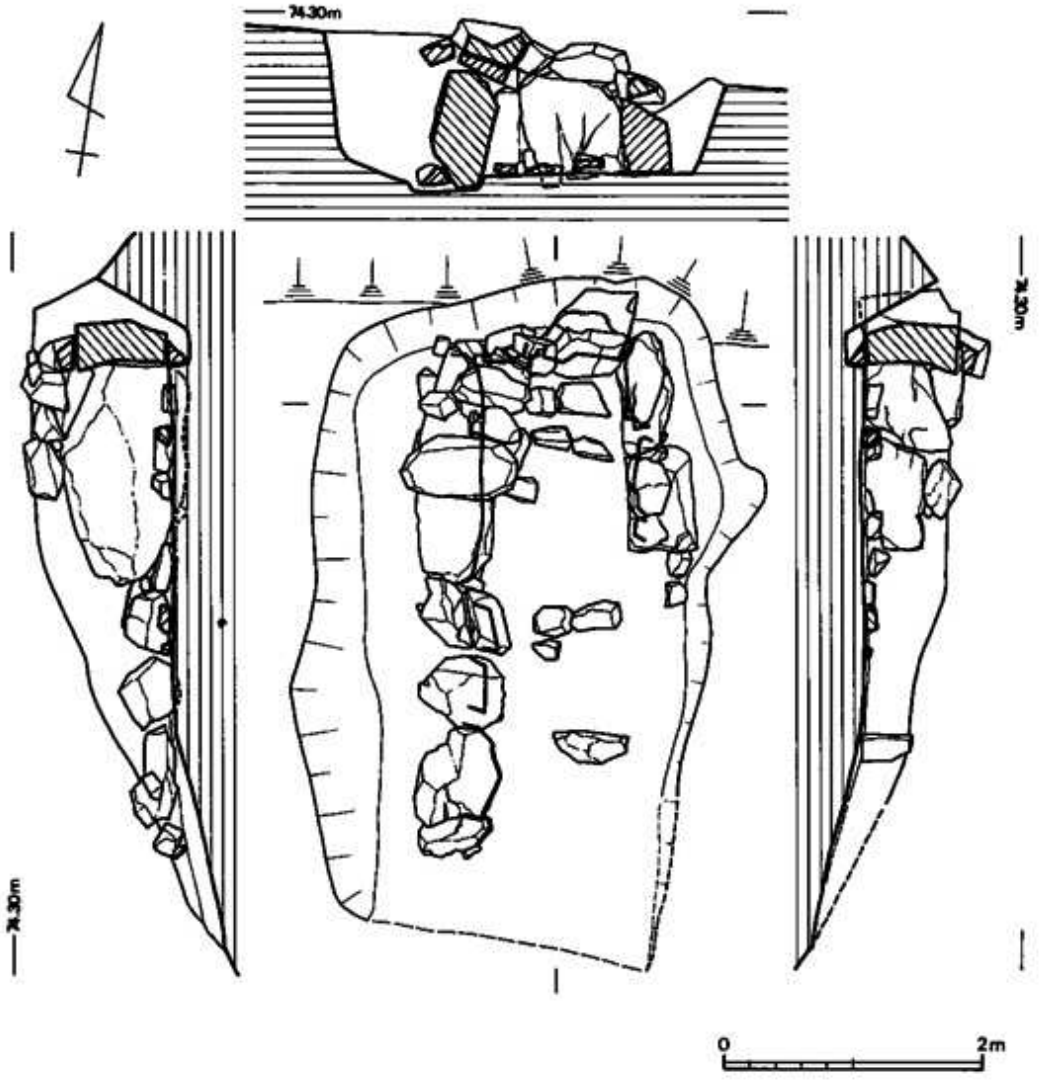


第5図　第2号古墳墳丘測量図（1：200）

第6図　第2号古墳近景（西南から）

い大型の石を広口積みして，各々基底石としている。これらの基底石上に30～60cm大の長方形の石２個を横積みしている。なお，２つの基底石間の床面付近に20cm大の角礫を石室内側から楔状に詰めて両基底石の固定を図る一方で，東側の基底石下には10数cm大の角礫を台石状に詰め込んでいる。基底石の下面を西側壁同様，最大10cm掘り込んでいる。

東側壁は，最奥部及び奥から２番目の基底石とこれらの基底石上１段分の石材を残し，入口側の石積みはすべて欠失している。基底石は，最奥部のものが70×70cm，厚さ40cm，奥から２番目のものは50×80cm，厚さ50cmの各々分厚い石を横長に立てている。前者は上辺が奥壁側に下傾しており，この上に40×70cm，厚さ26cmの長方形の石を横積みにしている。



第７図　第２号古墳石室実測図（１：60）

1．石室全景
（南から）

2．基底石

3．掘り方

第8図　第2号古墳石室

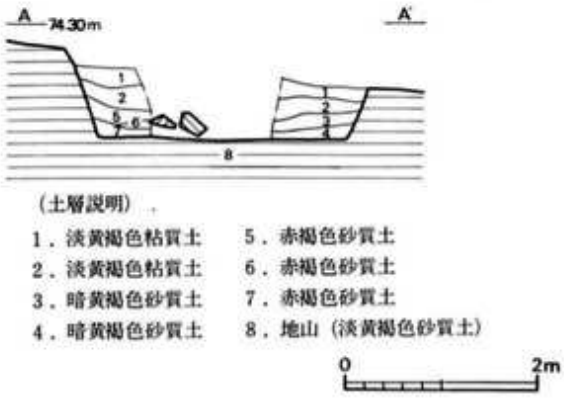
1．奥　壁

2．東側壁

3．西側壁

第9図　第2号古墳石室

奥から２番目の基底石上には，33×45cm，厚さ30cmの石をやはり横積みに積んでいる。なお，東側壁の基底石は，いずれも床面への掘り込みは認められなかった。また，奥壁と両側壁の接合部分及び東側壁の最奥部と奥から２番目の基底石間には，石室裏側から10～20cm大の角礫を楔状に詰めており，いずれも各基底石の固定を図ったものと考えられる。



第10図　第２号古墳石室掘り方土層断面図（１：80）

各基底石の組み方の順序については，最初に奥壁の東側基底石を据えている。次いで，最奥部の東側壁基底石→奥から２番目の東側壁基底石，あるいは奥壁の西側基底石→最奥部の西側壁基底石が構築されている。石室が掘り方の東辺にやや偏在気味なことを考えれば，東側壁の構築が奥壁に次ぎ，次いで西側壁の構築を行ったものと考えられる。なお，西側壁の奥から２～５番目の４個の基底石の構築順序については明確にできないが，他の石室の例からすると奥から順に据えていったと考えるのが妥当であろう。

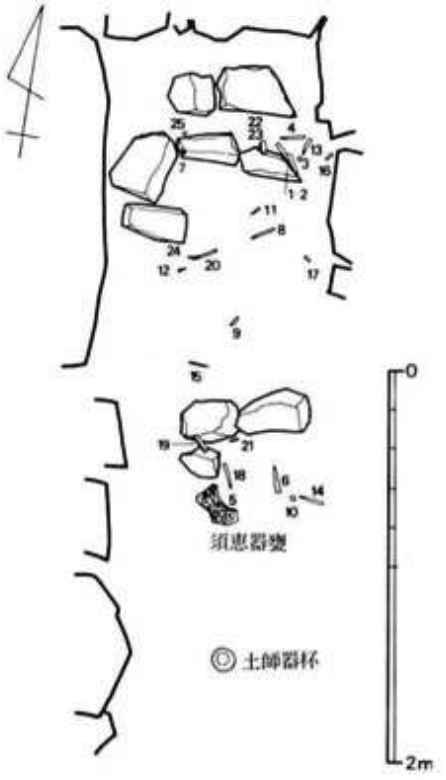
奥壁から2.8mの石室入口の床面には38×56cm，厚さ23cmの扁平な石材が立ててあり，一種の閉塞石かと考えられる。床面には奥壁からこの石材の辺りまでほぼ平坦で，ここから1.5mほどはゆるやかに下傾し，奥壁から4.4mのあたりでさらに傾斜を強めて，自然斜面につらなる。床面がほぼ平坦な閉塞石までを埋葬空間と捉えることができよう。その広さは，長さ2.8m，幅1.1mである。この範囲の床面には，厚さ10cm程度の20～40cm大の板石９個が認められ，その配置状況から棺台石と推定される。この棺台石の周辺から多数の鉄釘が出土している。鉄釘が出土する範囲は，南北２m，東西0.8mで，棺台石の位置とも考えあわせて，ほぼこの位置に木棺が安置されていたものと思われる。なお，鉄釘の出土状況から考えて，埋葬は１回であろう。

第11図　第２号古墳調査風景（南から）

(3) 出土遺物（第14～18図）

石室内で鉄釘25本，須恵器甕片１，閉塞石外で土師器杯１が出土している。

鉄釘（第16～18図）は，完形品10本，破損品15本である。完形品の長さは，5.4 ～12.7cm（11cm代が主），平均値10.94cmである。釘頭の形態による分類として，Ａ類；釘頭を逆Ｌ字形に折った折頭形のもの，Ｂ類；正面観は釘の上端を左右にやや突出させ，側面観は∩あるいは⊓形を呈するもの、Ｃ類；釘頭は釘身をやや太くしただけで，両者の区別がつきにくいもの，の３形態がある。第２号古墳出土の鉄釘の中で釘頭の形態の分かるものは19点であり，その内訳はＡ類12点，Ｂ類５点，Ｃ類２点で，Ａ類の占める割合が高い。また，釘身に木質が付着するものが14点と多く認められるが，木目が横走するもの８点，縦走するもの６点で，両者が併存するものは皆無である。鉄銹の付着が顕著で，木質のすべての状況が判明しているわけではないが，木目が横走するものは，釘頭から釘身の先端まですべて横走する木質が付着するもの２例，釘頭直下１～1.5 cmの辺りまでのみ横走する木質が付着するもの２例などであるのに対し，縦走する木質をもつ鉄釘は，釘頭から釘身の先端まですべて木質の木目が縦走するか，あるいは釘身の先端付近にのみ縦走する木質が付着する例ばかりである。この付着する木質の木目の走向方向の違いは，鉄釘の緊結部位の違いに基づくもので，「（木棺の）蓋か底に釘をうつときは基部・先端とも横目となり，側板にうつときは基部が横目で先端は縦目になる[11]」ということからすれば，横走する木質が付着する鉄釘のうち，釘頭から釘身の先端にまでほぼ全面的に木質が付着するものは，木棺の蓋か底板に打ち付けられた鉄釘で，釘頭付近の



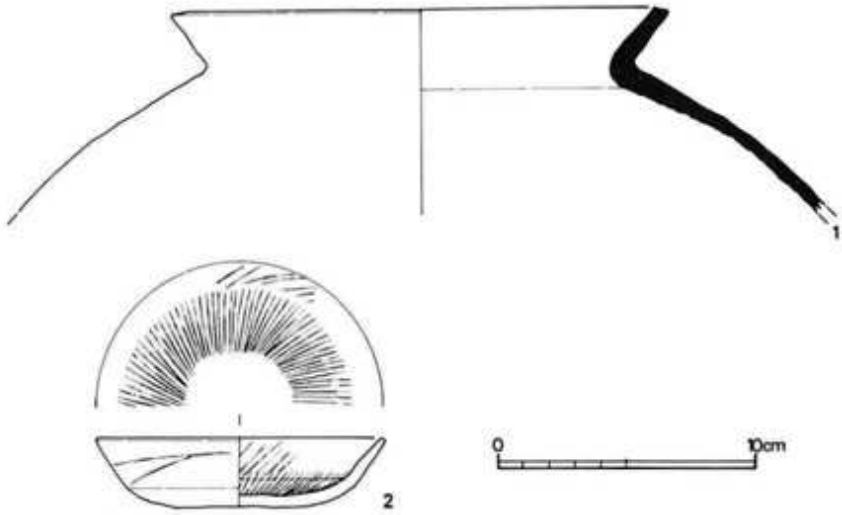
第12図　第２号古墳石室内遺物出土状況実測図（１：40）

第13図　第２号古墳土師器出土状況

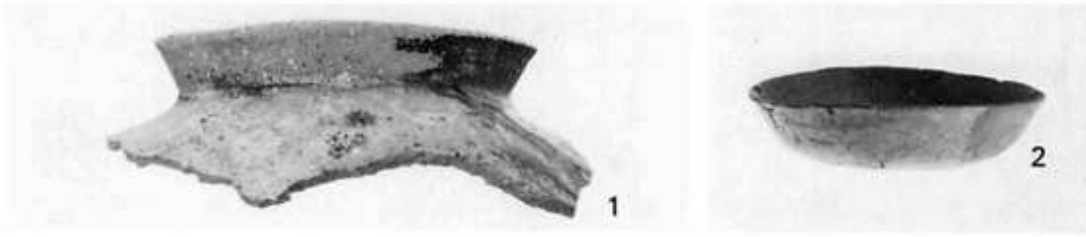
みに横走する木質が付着するものや縦走する木質が付着する鉄釘は，木棺の側板に打ち付けられた鉄釘ということになろう。第２号古墳出土の鉄釘で，底板・蓋に打ち付けられたと考えられるのは，２・15・22で，側板に打ち付けられたと考えられるものは，１・３・４・８・12・13・14・20である。釘頭の形態とこの緊結部位との関連性については，Ａ類の鉄釘は６点が側板で，他は緊結部位不明である。Ｂ類は底板・蓋に打ち付けられたもの２点，側板１点，緊結部位不明のもの２点である。Ｃ類はいずれも緊結部位不明である。即ち，現状ではＡ類は側板と，Ｂ類は底板・蓋との関連性が認められる。

須恵器甕（第14図１）は，鉄釘５の下から出土した口縁部片で，復元口径19.2cmである。頸部から屈曲して短かく外上方にのびる口縁部の端面はやや凹むがほぼ平坦で，若干外傾している。調整は，口縁部内外面は横ナデ，胴部外面は縦方向の平行叩き目を一部残す。胴部内面は同心円叩き目を顕著に残す。色調は，器表面・断面とも淡灰色で，外表面には灰緑色の自然釉がみられる。焼成は良好である。

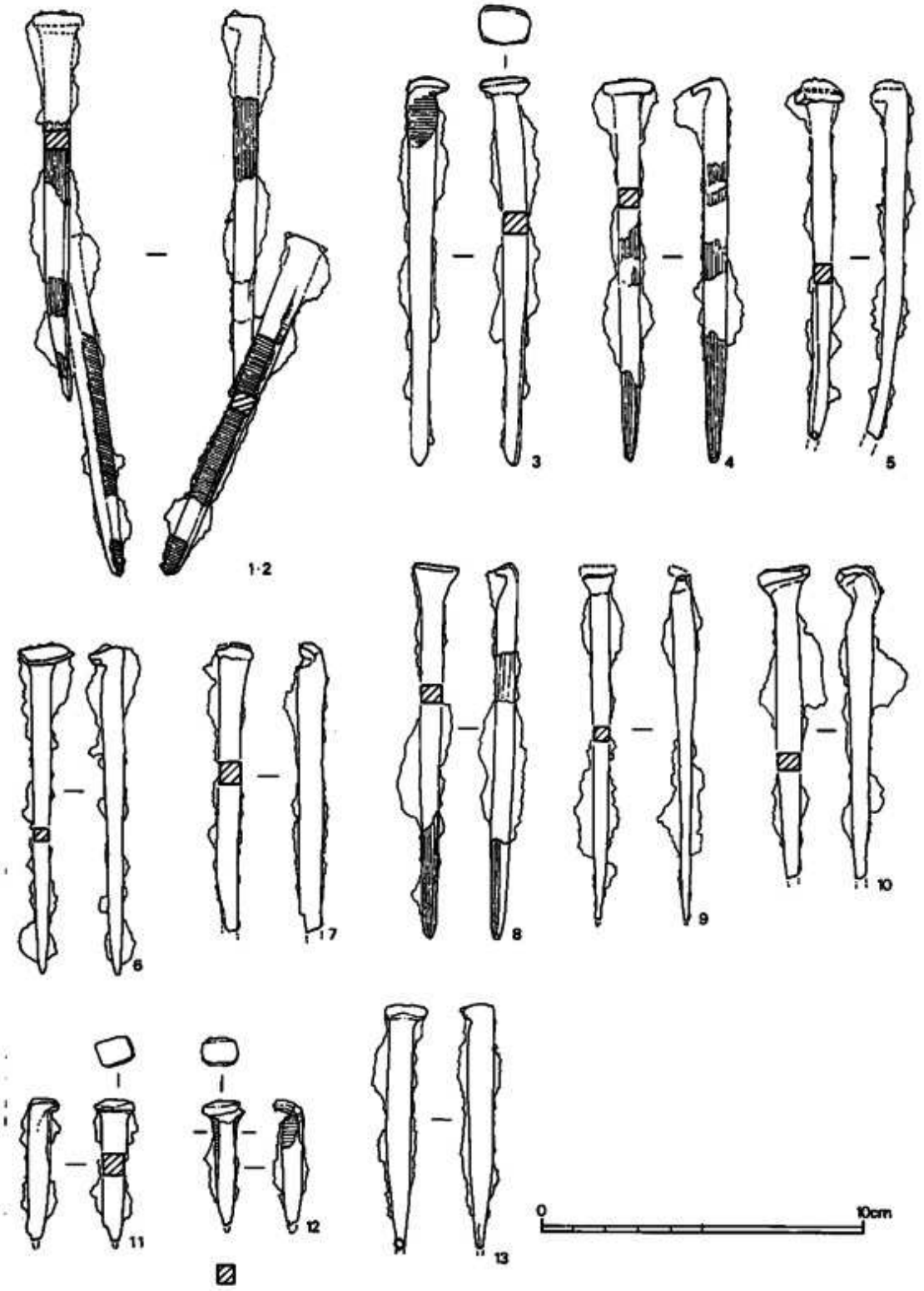
土師器杯（第14図２）は，口径11.2cm，器高2.65cmのほぼ完形品で，内面に２段の放射状暗文がみられる。ほぼ平坦な底部からゆるやかに屈曲して，外上方に短かくのびる口縁



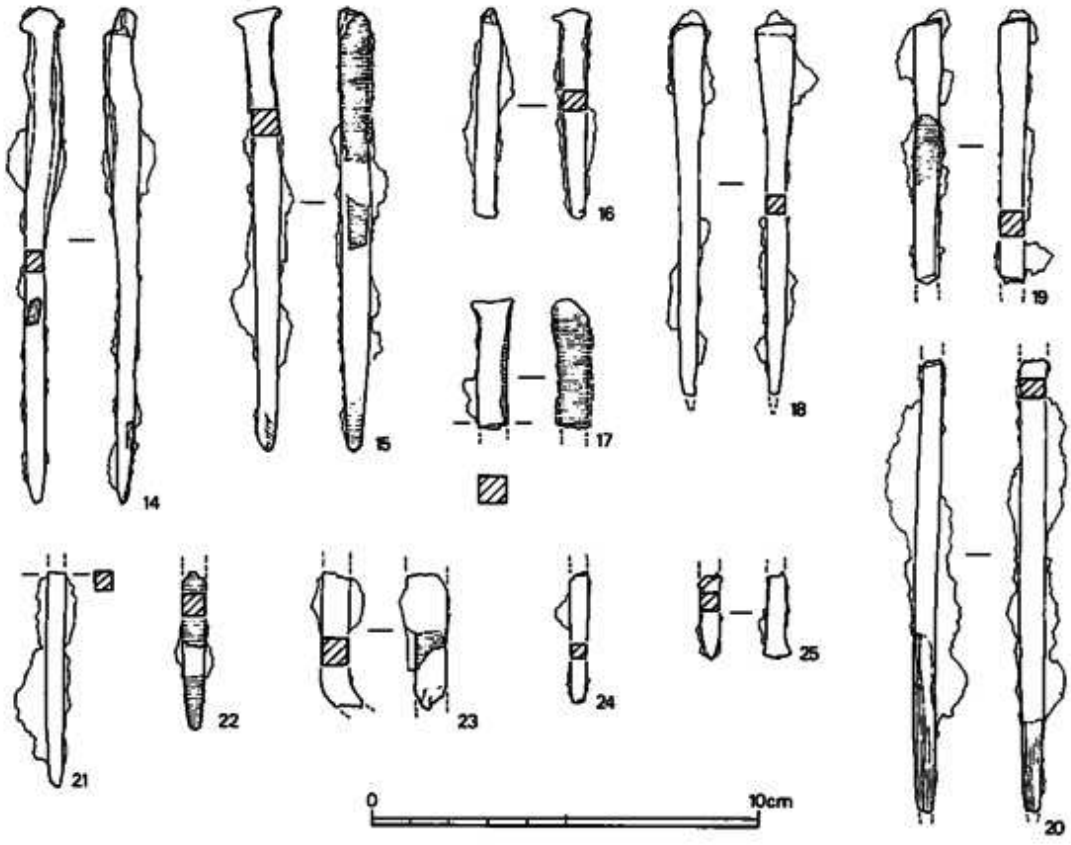
第14図　第２号古墳出土遺物実測図（１）（１：３）須恵器・土師器



第15図　第２号古墳出土遺物



第16図　第２号古墳出土遺物実測図（２）（１：２）鉄釘

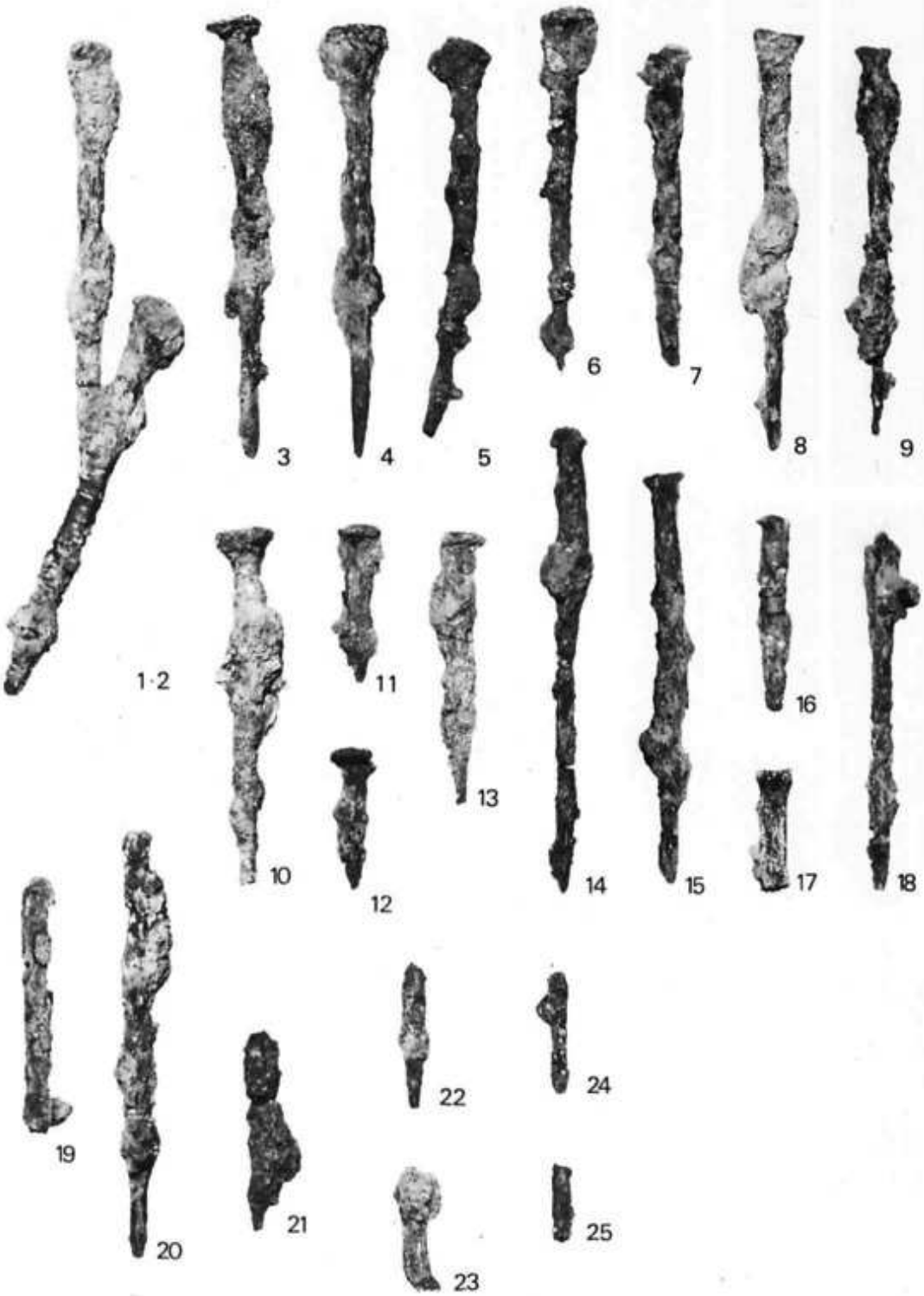


第17図　第２号古墳出土遺物実測図（３）（１：２）鉄釘

部が付く。調整は，内面～外面は横ナデ，外底面にはヘラ状工具による粗いケズリ状のナデが認められる。暗文は，胴部外面にも横走するものが認められる。

小結

第２号古墳は，東西にのびる主尾根の南斜面に立地する横穴式石室を内部主体とする古墳である。石室背後の周溝については，その有無は明らかでない。横穴式石室はほぼ南方向に開口し，西側壁の長さ3.80m，奥壁付近の幅1.12m，西側壁の高さ1.06mの現存規模をもつ。石室は，掘り方の東辺に寄せて構築されており，現状では天井石及び入口側の東側壁を欠失しており，基底石及び基底石上１段分の石材を残すにすぎない。石室入口の床面には板石を立てて閉塞石としており，内側の長さ2.8m×幅1.1mの空間に，棺台石とみられる板石を敷いており，周辺からは鉄釘25本が出土している。鉄釘の出土する範囲は２m×0.8 mで，ほぼ同程度の規模の木棺が安置されていたものと考えられる。鉄釘は平均長11cm弱の長大なもので，釘頭の形態から大きく３類に分類することができた。第２号古墳からの出土遺物としては，須恵器甕・土師器杯があり。これらの出土遺物などから，本



第18図　第２号古墳出土遺物　鉄釘

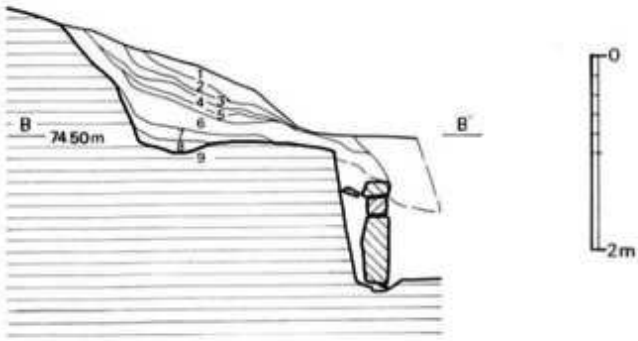
古墳の築造時期を大略７世紀代と捉えておきたい。

（註）広島県教育委員会「常定峯双遺跡群の発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第７集　昭和42（1967）年。

２．第４号古墳

(1)　立地・周溝・石室（第19～24図）

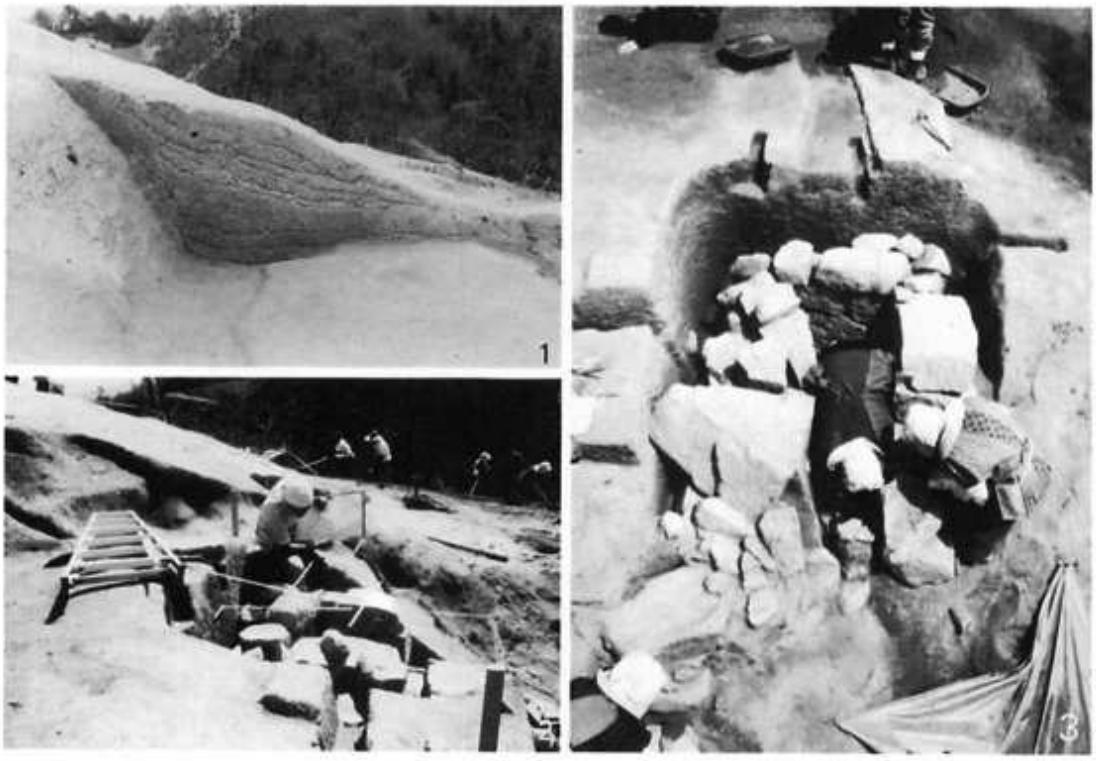
本古墳は，第３号古墳の西南方に近接し，２つの尾根の付け根付近の急崖に臨むやや急峻な南斜面に築造されている（標高73～76m）。内部主体は，ほぼ南方向（N15°E）に開口する小型の横穴式石室で、傾斜角度20°の斜面を半円形にカットしてつくられた平坦な墳丘の中央



（土層説明）

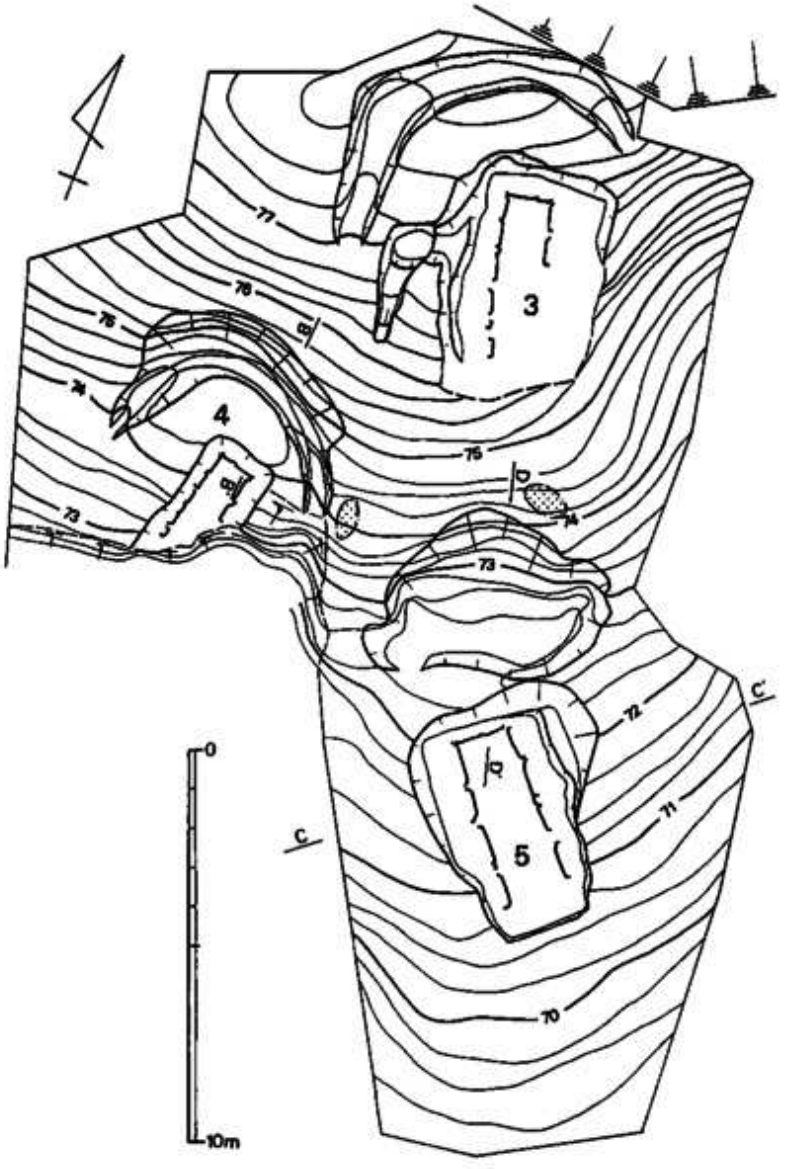
１．淡黄褐色砂質土	４．灰白色粗砂質土	７．黄褐色砂質土
２．淡黄褐色砂質土	５．淡黄褐色砂質土	８．黄褐色砂質土
３．淡橙褐色砂質土	６．黄褐色砂質土	９．地山（花崗岩バイラン土）

第19図　第４号古墳周溝土層断面図（１：80）



第20図　第４号古墳周溝断面及び調査風景

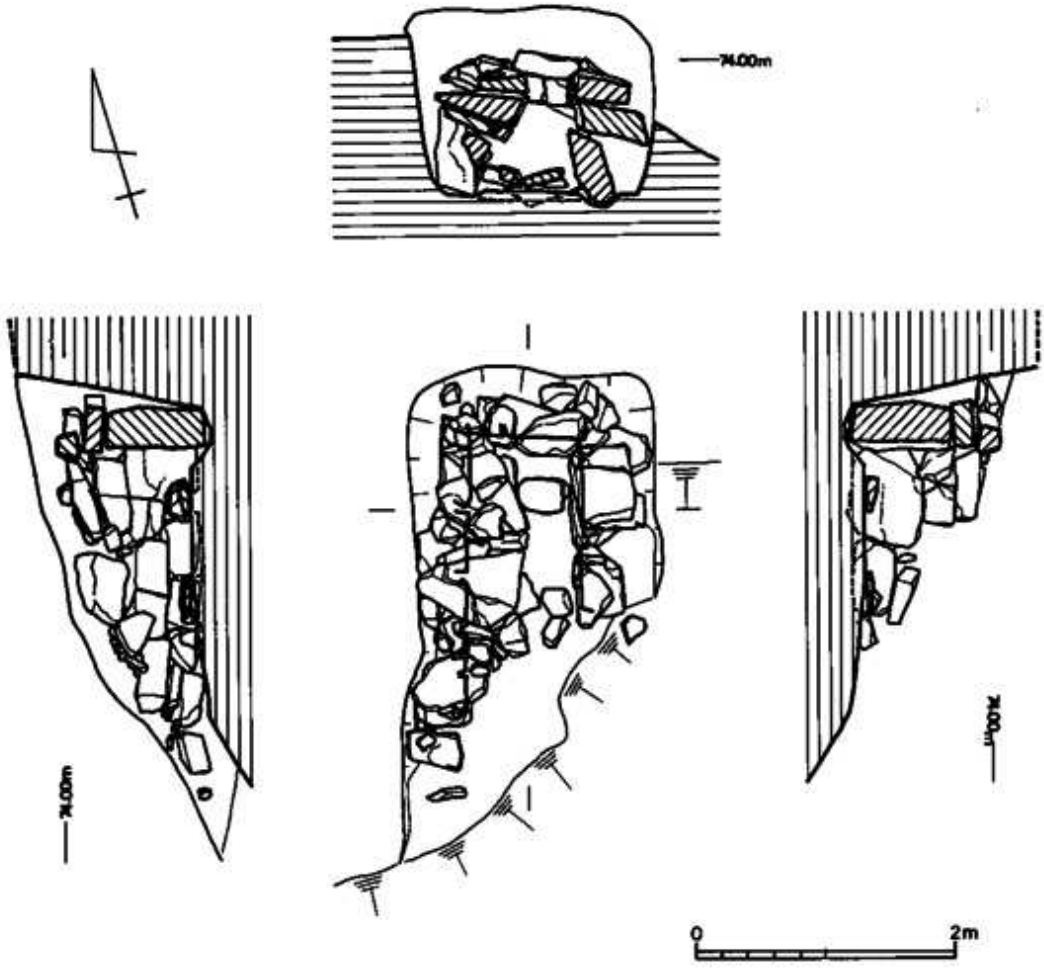
に構築されている。この石室背後のカット面壁際に，幅約70cm，深さ８cm程度のごく浅い周溝が掘り込まれている。石室は，平面形が隅丸長方形で，長さ3.8m，幅1.9m，深さ1.4mの現存規模をもつ掘り方内いっぱいに築かれている。すべての天井石は抜き取られており，入口側の東側壁の石材も崖下に転落したのか欠失している。また，西側壁は，基底石上の２～３段の積み石が大きく石室内にずれこんでおり，全体に石室の残存状況は良好とはいえない。石室の現存規模は，西側壁の長さ3.09m，奥壁付近の幅0.85mで幅がほぼ均一の無袖の横穴式石室である。



第21図　第３・４・５号古墳墳丘測量図（１：200）アミ目は焼土を示す。

石材の積み方については，奥壁，最奥部両側壁の基底石は広口積み，両側壁の最奥部以外の基底石（ただし，東側壁については，奥から２番目の基底石の状況しか判らない）は小口積み・横積み，基底石上の石積みについては２～３段分が残存するが，これらはいずれも小口積み・横積みの方法をとっている。西側壁についてやや詳しく述べると，先ず基底石は最奥部のものが一辺60cm，厚さ30cmの正方形に近い石を立てて用いているのに対し，奥から２～６番目の基底石については，最小のものが28×34cm，厚さ30cm，最大のもので44×58cm，厚さ32cmの正方形に近い石を，横積み及び小口積みしている。

基底石上の積み石については，基底石上に２～３段分の石積みがみられる。先ず一段低い奥から２～５番目の基底石上に３個の石を小口積み・横積みして，最奥部の基底石の高さに合わせている。奥壁寄りの石が最も小さく，20×50cm，厚さ10cmの石を小口積みしている。



第22図　第４号古墳石室実測図（１：60）

1．周溝・石室
（南から）

2．石室全景

3．基底石

第23図　第４号古墳石室

1．掘り方

2．東側壁

第24図　第4号古墳石室

中央の石は大型の石で，中心部分で割れているものの，44×90cm，厚さ26cmの石を横積みしている。入口寄りの石材は，40×70cm，厚さ26cmのやや不整の長方形の石を小口積みしている。これらの石及び最奥部の基底石上には2～3個の石材を小口積み・横積みしている。いずれも，60～80cm大で厚さ20～30cmのやや大型で不整方形の石である。この上に30×70cm，厚さ10cmの長方形の石材が残存するが，原位置をとどめていない可能性がつよい。西側壁の基底石下面の床面の掘り込みはみられるが，基底石下や基底石間の小角礫の詰め込みは認められない。

奥壁は，80×95cm，厚さ30cmの石を基底石として用い，これを横長に立てている。ただ，この基底石の下辺は山形を呈していて不安定なため，10cm強の深さに床面を掘り込んで，左

右から30～40cm大の三角形の石を楔状に詰めて，基底石の安定を図っている。基底石上には現状で２段分の石積みが認められる。１段目は，西側に40×50cm，厚さ20cmのやや大きめの石を，東側には16×20cm，厚さ20cmの石をいずれも横積みしている。基底石上２段目は，西側に20×30cm，厚さ16cmの小角礫，東側には30×60cm，厚さ16cmのやや大きめの石を積んでいる。前者は小口積み，後者は横積みにしている。

次に，東側壁については，最奥部の基底石は60×80cm，厚さ42cmの石を横長に用い，奥から２番目の基底石は最奥部のものよりやや小型で，38×58cm，厚さ30cmの石を横積みしている。これらの基底石上に２段分の石積みがみられ，１段目は最奥部の基底石上に２個の石材が残存している。奥壁寄りのものが46×60cm，厚さ24cmの石，入口側のものがやや小ぶりで30×50cm，厚さ40cmの石を小口積みしている。基底石上２段目は現状で１個の石材が残る。46×50cm，厚さ20cmの石を横積みしている。東側壁の基底石下面にも，掘り込みがみられるが，基底石下や基底石間への小角礫の詰め込みはみられない。

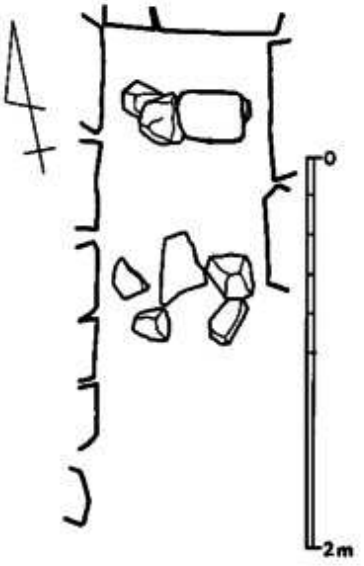
石室の床面は、奥壁から２ｍまでほぼ平坦で，この辺りからやや強く傾斜して、奥壁から2.5m付近で急激に落ち込んで崖面に連なる。また，奥壁から1.3m付近の範囲に20～30cm大の板石５個が存在しており，棺台石と考えられる。棺台石の周辺から鉄釘６点以上が出土しており，木棺の存在が考えられるが，木棺の構造・規模等は明らかでない。

(2) 出土遺物（第26・27図）

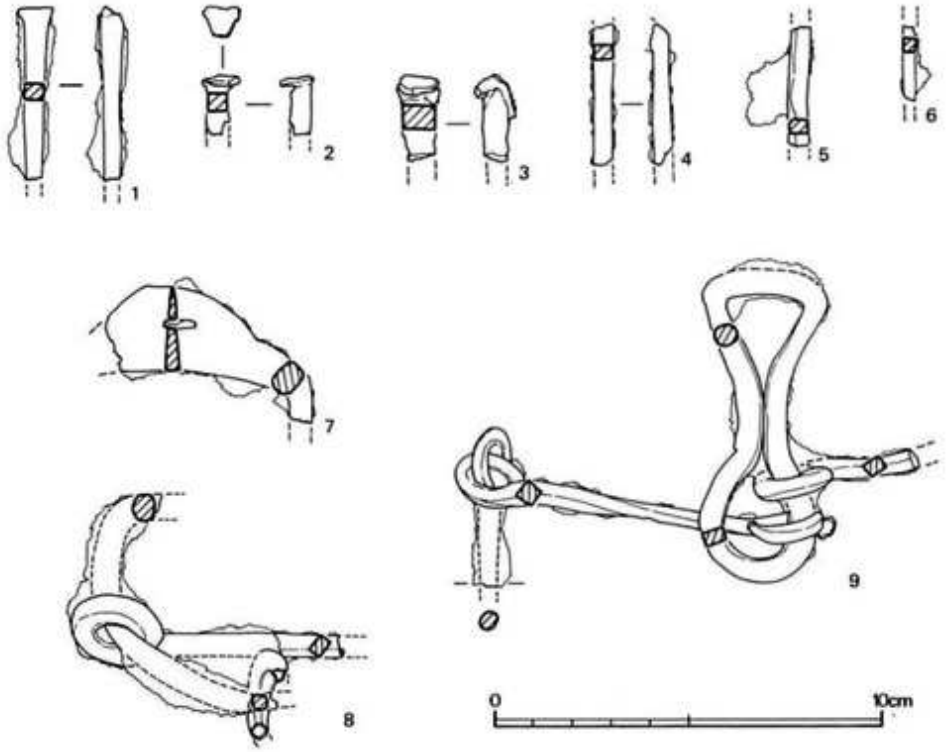
石室内から鉄釘片６点以上，周溝東南端で馬具と考えられる鉄製品３点が出土している。

鉄釘（第26図１～６）は，完形品は皆無でいずれも破損品である。Ａ類の釘頭を残すもの２点（２・３），Ｂ類の釘頭を残すもの１点（１），釘頭を欠失するもの３点（４～６）である。釘身に木質が付着するものは認められない。

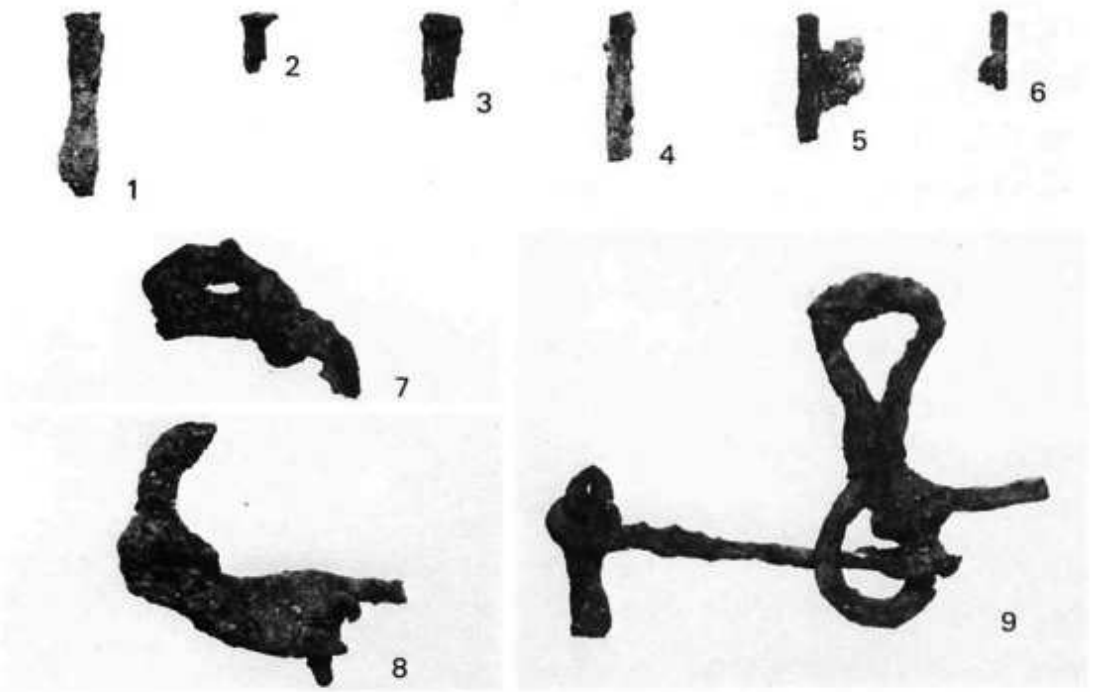
７～９の３点は，周溝の東南端で一括出土した鉄製品で，いずれも馬具の轡の断片と考えられる。これらは一連のものと考えられ，７・８は鏡板の部分であろう。鏡板は楕円形の素環のもので，７は立聞の部分である。中央に長方形の穿孔がみられる。８には，外径2.2～2.3cmの環及び環をもつ断面方形の棒がついている。９は，中央の長さ8.05cm，幅3.2 cmの８字状の金



第25図　第４号古墳棺台石検出状況実測図（１：40）



第26図　第４号古墳出土遺物実測図（１：２）鉄製品



第27図　第４号古墳出土遺物　鉄製品

具に２本の環をもつ断面方形の棒が取り付いている。一本の棒は両端に環が付くもので，棒状部分は一回程度ひねってある。この棒のもう片方の環にも，環をもつ断面円形の棒が付いている。この９については，轡のどの部位なのか判然としない。

小結

第４号古墳は，２つの尾根の基部の崖面に臨む急斜面に築造された古墳である。内部主体である横穴式石室は，急斜面をカットして造られた平坦面中央の掘り方いっぱいに構築されており，その現存規模は，西側壁の長さ3.09m，奥壁付近の幅0.85m，奥壁の高さ1.08m である。天井石・入口側の東側壁を欠失し，基底石及び基底石上１～３段分の石積みを残す。石室規模が本古墳群中最小で，石室の構築の仕方も乱雑である。床面には棺台石とみられる板石が存在し，その周囲から数本の鉄釘片が出土しているが，他に伴出遺物がないために，明確な古墳築造時期をおさえることができないが，石室規模や，乱雑な石室構築法，立地の特異性などから考えて，本古墳群でも最後出のものと考えられる。

３．第５号古墳

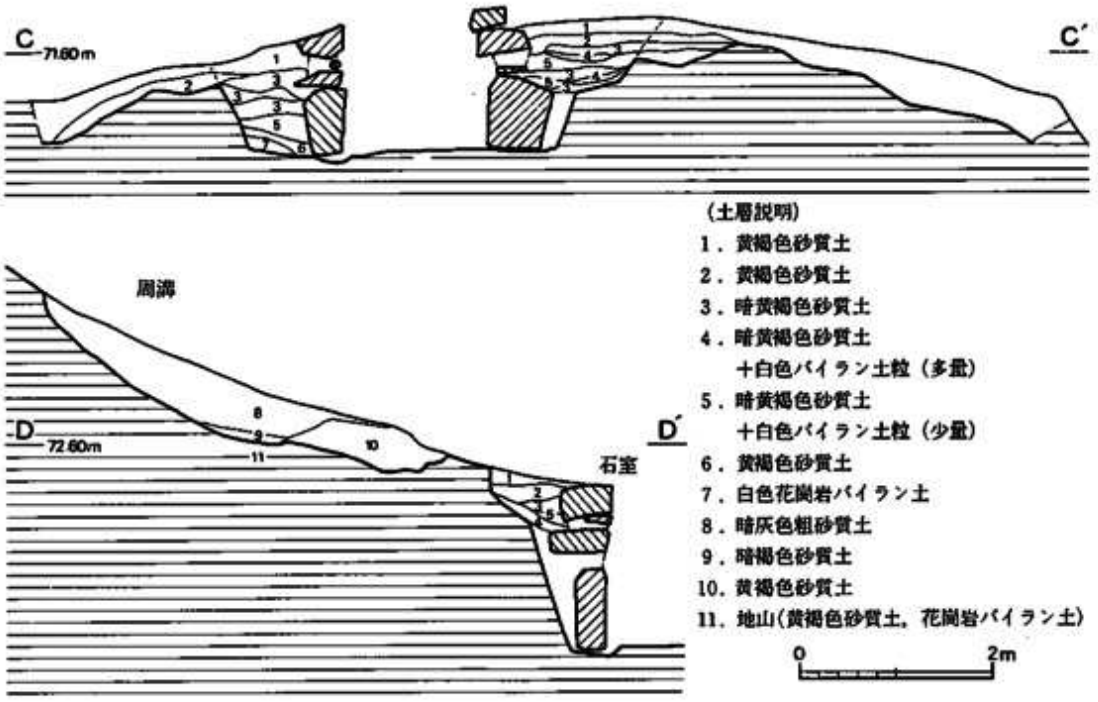
(1) 立地・周溝・石室（第28～33図）

本古墳は，第２号古墳が位置する東西方向の主尾根から南方向に延びた支尾根上に立地する（標高71～74m）。同じ支尾根の基部付近には第３号古墳が立地し，この第３号古墳の７m 南方に第５号古墳が位置する。内部主体は，東南方向（N42° W）に開口する横穴式石室で，石室背後には傾斜角度25°の急斜面を掘り込んだ半円形の周溝が存在する。この周溝の規模は，東西6.4 m，南北4.5 m の不整楕円形で，深さは最大1.56m である。底面はゆるやかに東から西に下傾する。石室は，この周溝に南接するように掘り込まれ，平面やや北東部が張った形の隅丸長方形で，長さ5.94m，幅4.94m，深さ1.98m の掘り方のほぼ中央に構築されている。石室の石材の残存状況は，奥壁側の最も残りの良い箇所で基底石上に３段の石積みが残存している。両側壁の入口側はいずれも基底石が残るのみである。天井石はすべて欠失している。石室の現存規模は，長さは西壁で4.36m，幅は奥壁側で1.30m，入口側で1.52m，高さは奥壁で1.67m で，若干入口側が開く無袖の横穴式石室である。なお，この第５号古墳の特徴の一つとして，周溝の中心線と石室の中心線が合致せず，石

第28図　第５号古墳近景（東から）

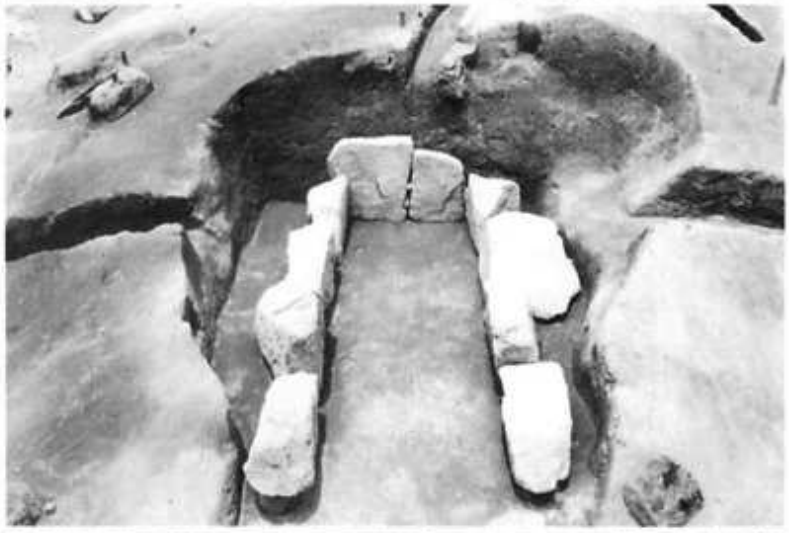
室の中心線が周溝のそれよりやや西に振れている点があげられる。

石材の積み方について，やや詳しく述べる。基本的には，両側壁各４個，奥壁２個の基底石はすべて広口積みし，基底石上の石積みは最も残りの良い奥壁側で最大３段，基底石より小型の石を小口積み・横積みする。次に，西側壁から具体的にみていこう。西側壁の基底石は４個で構成される。最奥部と奥から２番目の基底石がほぼ同規模で，65×100cm，厚さ40cmである。奥から３番目の基底石はやや大型で，90×100cm，厚さ60cmである。入口の石は他の基底石と違い，50×116 cm，厚さ46cmと長細い石を用いている。これら西側壁の４個の基底石はいずれも横長に立てている。基底石上の石積みは，最奥部及び奥から２番目の基底石上に１～３段認められる。奥から３・４番目の基底石上の石積みは残存していない。２段目は，２個の石とやや小さい石を用いて積み，高さが最も高い奥から３番目の基底石の上辺に高さを合わせている。奥壁寄りの石は56×94cm，厚さ38cmの石を横積みにし，奥から２番目の基底石上には，64×82cm，厚さ26cmの台形の石を小口積みしている。両者の間には間隙がみられ，20～30cm大の角礫数個を詰め石としている。３段目は，奥壁側２個が残存している。最奥部の石材は，40×70cm，厚さ30cmの石，奥から２番目の石は，62×84cm，厚さ34cmで，いずれも横積みにしている。４段目は，最奥部の１個の石材が残



第29図　第５号古墳周溝・石室土層断面図（１：80）

1．石室全景
（南から）



2．基底石

3．掘り方

第30図　第５号古墳石室

1．奥　壁

2．東側壁

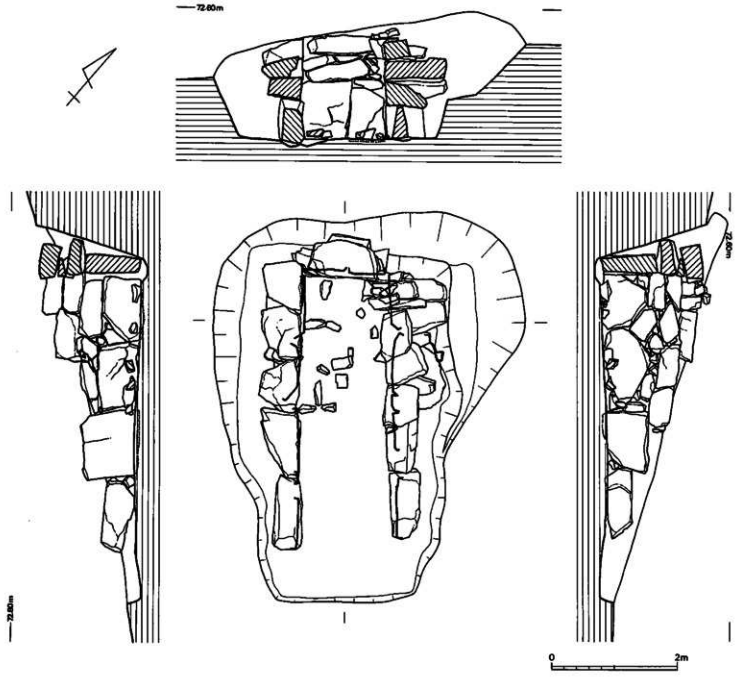
3．西側壁

第31図　第５号古墳石室

るだけである。60×80cm，厚さ30cmの台形の石を横積みにしている。

次に，奥壁について述べる。基底石は左右に２個の石材を基底石としている。奥壁の基底石は，両側壁の基底石に較べるとやや薄手の石で，西側の基底石は一辺90cm，東側のそれは60×84cmで，厚さはいずれも30cmである。これらの基底石を縦長に用いている。基底石上の石積みについては，先ず一段低い東側の基底石上に一辺50cmほどの三角形状の石を小口積みして，西側の基底石の上辺と高さを揃えたのちに，３段の石積みを行っている。２段目と３段目は西側に寄せて小口積みし，東端にできた間隙には10～30cm大の角礫数個を詰めている。２段目の石は60×106 cm，厚さ30cm弱の台形の石を横積みしており，３段目は30×60cm，厚さ16cmと30×46cm，厚さ10cmの小型の板石２個を，いずれも横積みにしている。４段目は，60×110 cm，厚さ30cmの長方形の石を横積みしている。

東側壁は，西側壁同様４個の石をいずれも横長に立てて基底石とし，これらの基底石上に１～３段の石積みが残っている。最奥部のものが70×94cm，厚さ54cm，奥から２番目のものは74×116 cm，厚さ80cmで，いずれも不整形の石を用いている。奥から３番目の基底石は，72×94cm，厚さ40cmの石を用いる。入口の基底石は，西側壁同様43×110 cm，厚さ50cmと長方形の細い石を用いている。これらの基底石上の石積みについては，現状では最奥部～奥から３番目の基底石上に１～３段分認められるが，入口の基底石上にはみられない。２段目は，最奥部の１個を除いて，やや小さめの石を主とした積み方を行っている。最奥部の石材は，65×96cmの長方形の石を小口積みしている。最奥部と奥から２番目の基底石は，上辺が山形をなして不安定であるため，これらの基底石上には石を詰め込んで，やや下傾気味ながらも上辺をほぼ水平に揃えている。これらの石は乱雑に詰め込まれているわけではなく，20×30cm～40×70cm大の長方形の石をいずれも小口積みしている。３段目は，奥壁側から石室入口側にむかって若干下傾気味ながらも，比較的形と大きさが整った石４個を並べている。最奥部の石は40×60cm，厚さ25cmの三角形の小ぶりな板石を，奥から２番目は60×90cm，厚さ30cmの長方形の石，奥から３番目は54×70cm，厚さ30cmの石，奥から４番目は55×64cm，厚さ36cmの石をいずれも小口積み・横積みしている。最奥部と奥から４番目の石は横積みに，最上段には，奥壁側に30×70cm，16×90cmの２個の小型の棒状の石を小口積みに，この南隣に50×74cm，厚さ30cmの長方形の石を横積みにしている。前二者の石材の上には，20cmほどの石３個程度をのせている。以上のように，第５号古墳の石室の構築法の特徴として二・三あげれば，先ず，基本的に基底石は広口積み，基底石上の石材は小口積み・横積みであることは言うをまたないが，基底石については奥壁は石材を縦長に用い，西側壁は石材を横長に用いている。基底石上の石積みについては，奥壁・

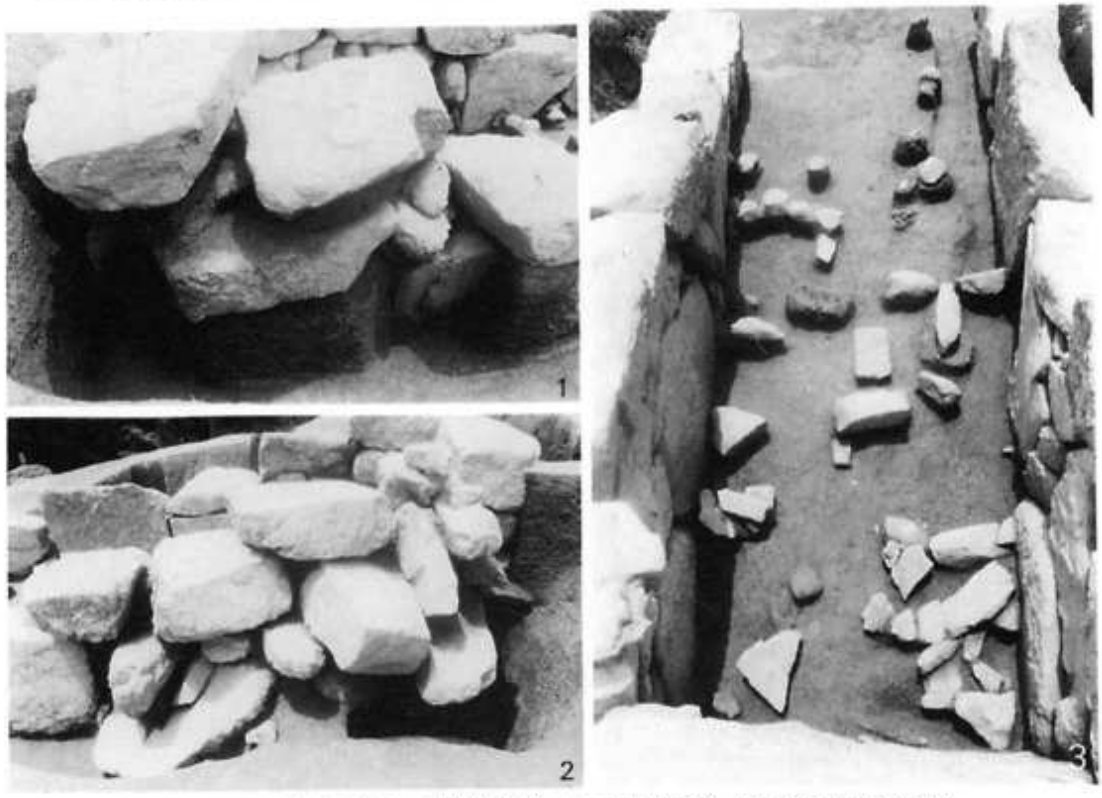


第32図　第５号古墳石室実測図（１：60）

西側壁は長方形の石を横積みに，東側壁は小口積みに積んでいる点があげられる。概して，第５号古墳の石室には形・大きさともに整った整美な長方形の石を用いて，整然とした石積みを行っている一方で，東側壁の基底石上１段目の石積みにみられるように，不安定な石材の上辺を揃えたり，高さを揃えるための石を間隙に詰め込む例がこの東側壁のみならず，奥壁や西側壁でもみられた。なお，基底石下面の掘り込みは全体的にみられるが，基底石下や基底石間への小角礫の詰め込みは全くみられなかった。これは下辺が平坦な比較的整美な石を用いていることと無縁ではないだろう。

石室床面は全体的にほぼ平坦で，奥壁から2.2mの範囲に10～30cm大の板石10数個が存在しており，棺台石と考えられる。第２号古墳のように一定の範囲から鉄釘が出土するということがなかったため，これらの棺台石上にどのような構造の木棺が置かれていたか明らかにしがたい。この棺台石の周辺で２対以上の耳環が出土しており，少くとも２～３回の埋葬が行われたことを示している。

なお，石室掘り方は，北東部が二段掘りとなっているが，これは奥壁側の東側壁の基底石上の石積みがいずれも長方形の石を小口積みしており，石室裏側に石材が長く突出していることと関連性がつよいと考えられる。



第33図　第５号古墳石室（１.西側壁背部　２.東側壁背部　３.棺台石検出状況）

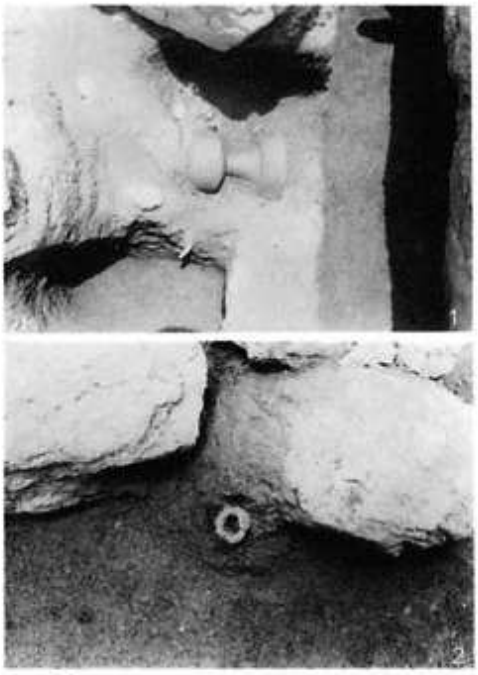
(2) 出土遺物

石室内から須恵器，耳環，鉄製品（鉄刀・鐔・鉄釘など）が，周溝内からは須恵器，鉄製品（馬具・鉄釘など）が各々出土している。

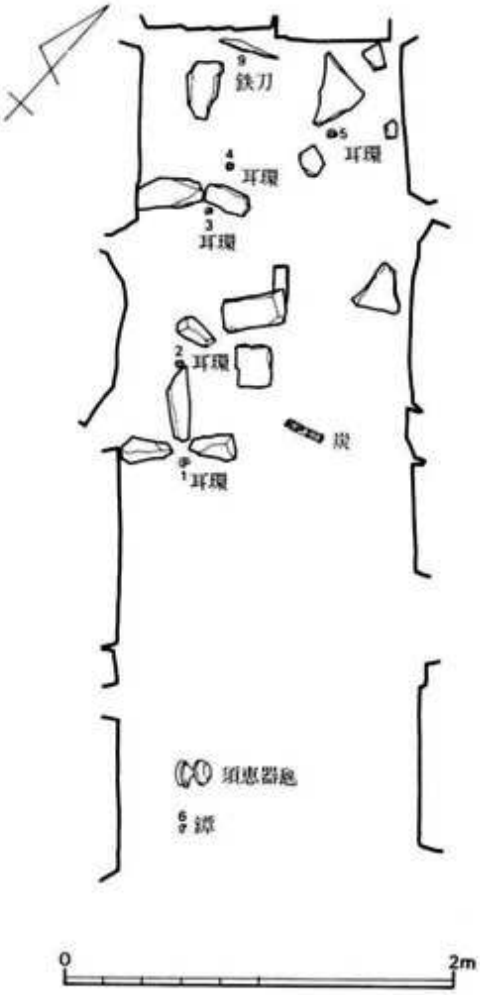
a．石室内出土遺物（第36・37・39・40図）

内訳は，須恵器4（坩蓋・杯身・甕・提瓶），耳環5，鉄製品12（鉄刀1・鐔1・鉄釘7・用途不明品3）である。

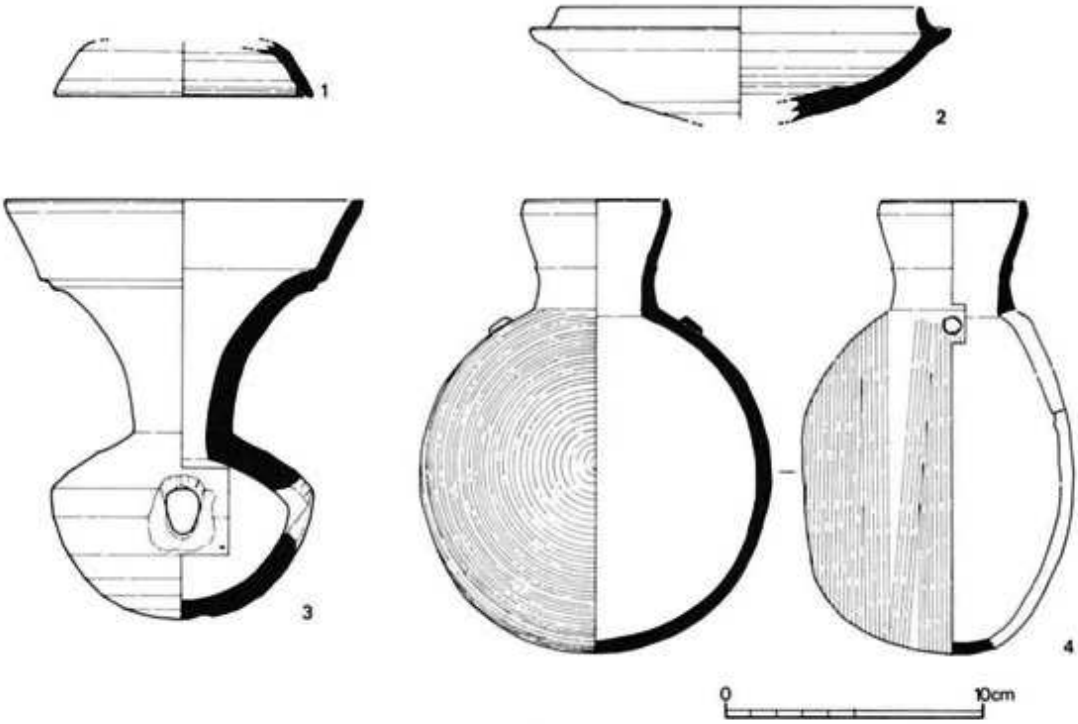
須恵器（第36図1～4）は，いずれも石室入口付近で出土している。1は坩蓋かと考えられるもので，復元口径10.0cmである。口縁端より若干内に入るごく短い受け部をもつ。調整は，内外面とも回転ナデを施す。色調は暗灰～灰褐色で，焼成はやや不良である。2は，復元口径16.3cmの杯身で，つよく突出する明瞭な受け部をもつ。調整は内底面ナデ，外底面へラケズリ，その他は内外面とも回転ナデを施す。色調は淡灰色で，焼成はやや不良である。3は甕で，西側壁から30cm離れた床面に横転した状態で出土した。復元口径13.8cm，器高16.1cm，頸基部径



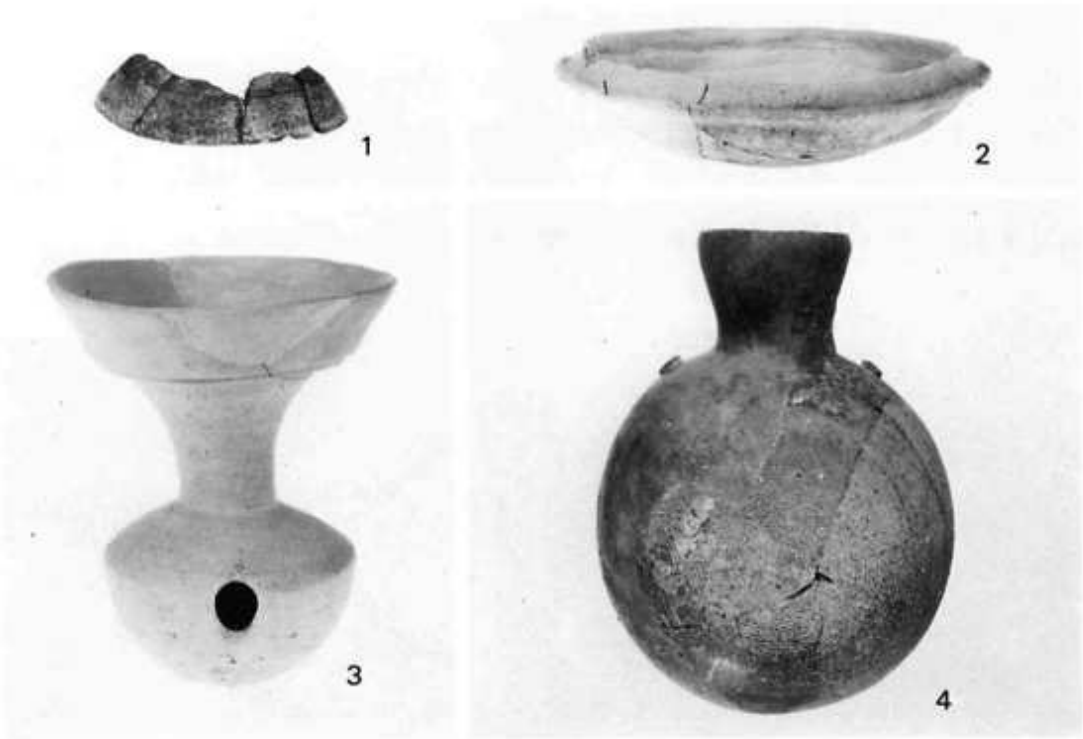
第34図　第5号古墳石室内遺物出土状況（1．甕　2．耳環）



第35図　第5号古墳石室内遺物出土状況実測図（1：40）



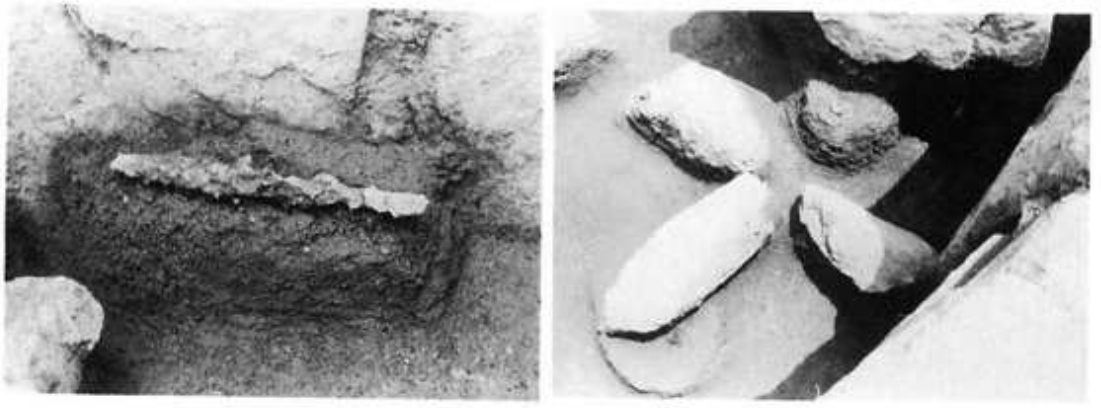
第36図　第５号古墳出土遺物実測図（１）（１：３）（石室内）須恵器



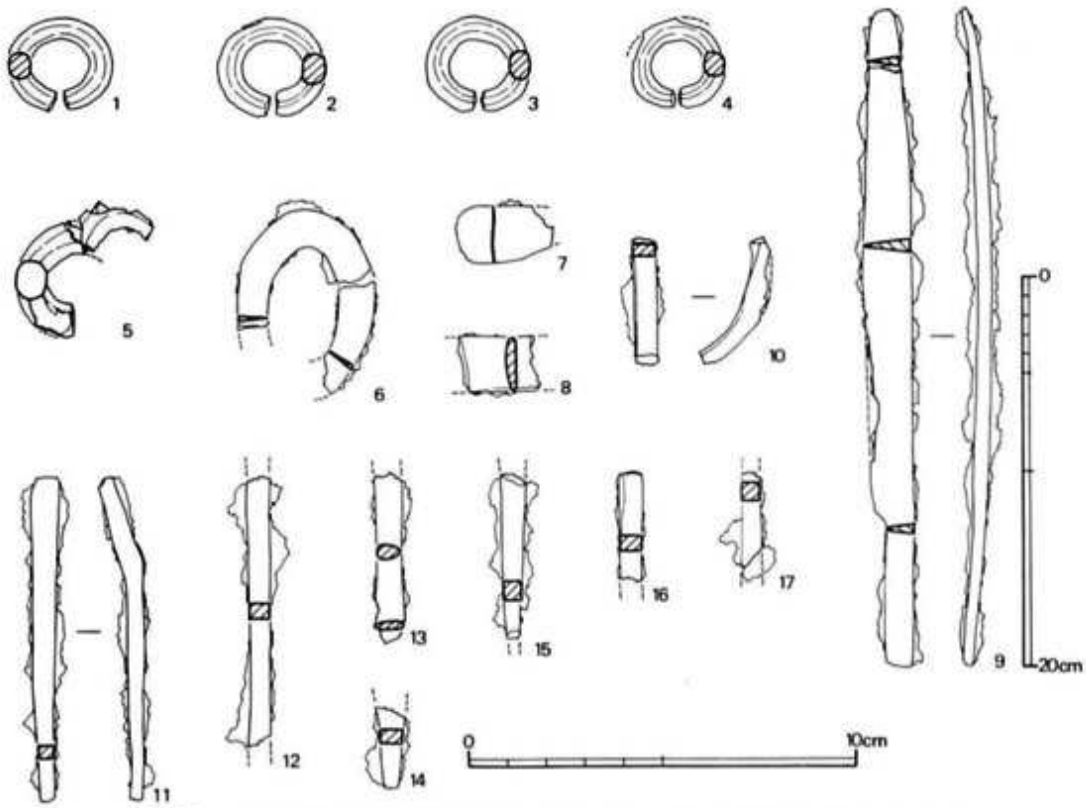
第37図　第５号古墳出土遺物

3.8 cm，胴部最大径10.1 cmである。細くしまった頸基部からラッパ状に開き，1 条の幅広沈線を介して口縁部につづく。口縁部はほぼ直線的に外上方にのび，端面は平坦である。胴部はやや肩の張る扁球形で，胴部中央の 1 箇所に1.3×1.8cmの縦長の円孔が穿たれている。この孔は上向きで，周縁は磨滅が著しい。調整は，内面～外面肩部は横ナデ，胴部外面は横位ヘラケズリである。底部は丸底である。色調は灰白色，胎土は比較的精良で，焼成はやや不良である。4 は提瓶で，復元口径5.6 cm，器高17.4cm，胴部最大径13.6cmである。胴部の正面観はほぼ正円，側面観は粘土板を充塡していない方は丸味をおびた台形状で，やや角張るのに対し，もう片方の粘土板を充塡している側は丸味は弱いがゆるやかなカーブを描く。口縁部は頸部から直立し，途中で若干屈曲して外上方に直線的にのび，端部近くでやや内傾させる。口縁端部は丸くおさめる。肩部には，径 1 cm，厚さ 2 ～ 3 mmの粘土瘤を貼り付け，鈕状の形骸化した把手としている。調整は，胴部外面は同心円状の細かなカキ目調整（7 ～ 8 条 / cm），内面は回転ナデを施す。胴部の一側面を粘土円板で塞いでいる。口縁部の内外面は細かい回転ナデを施す。色調は，器表面が暗青灰色，断面は濃茶褐色である。胎土は比較的精良で，焼成も良好である。

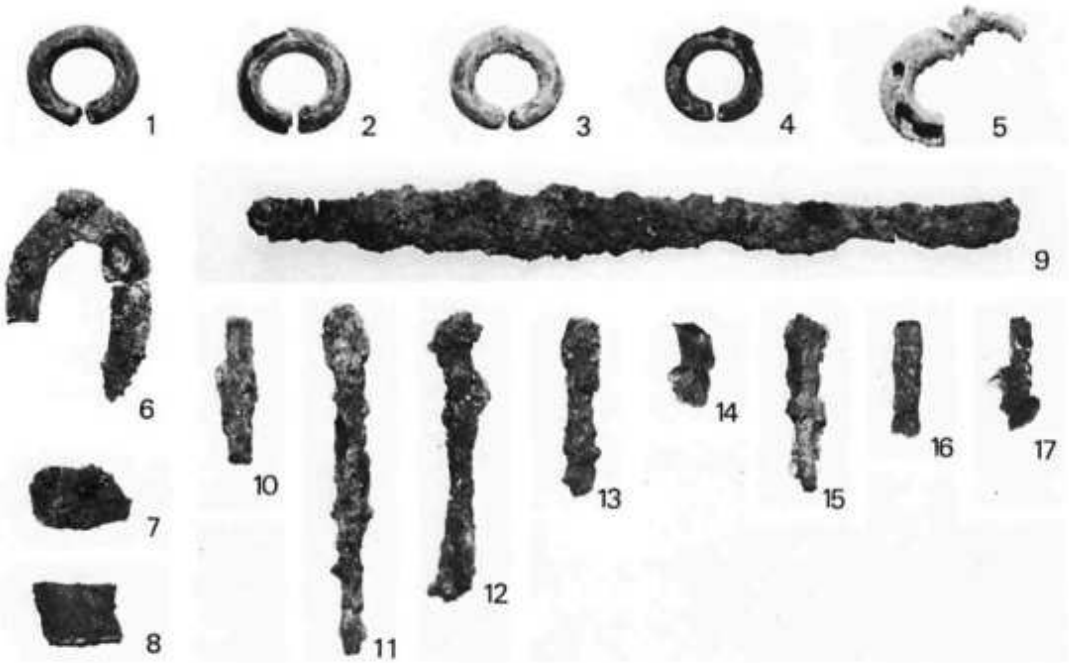
耳環（第39図 1 ～ 5）は，中実のもの（1 ～ 4）と中空のもの（5）がある。いずれも銅芯金張りのもので，1 ～ 4 は内側面を中心に金箔が残るが，5 には殆んど金箔が残存していない。1 は，外径2.40×2.65cm，断面径0.55×0.70cm，2 は，外径2.50×2.75cm，断面径0.6×0.75cm、3 は，外径2.40×2.65cm，断面径0.55×0.70cm，4 は，外径が2.35×2.40cm，断面径0.55×0.60cmである。いずれもその断面形はやや縦長の楕円形で，銅芯の両端は 1 ～ 4 mmの隙間をもたせている。5 は中空の耳環で，原形の約½が残存する。その復元外径は約 3 cm，断面径0.8×1.0cm，断面形は縦に若干長い楕円形である。



第38図　第 5 号古墳石室内遺物出土状況
（左，鉄刀・右，耳環）



第39図　第５号古墳出土遺物実測図（２）（１：２）（石室内）耳環・鉄製品



第40図　第５号古墳出土遺物（石室内）耳環・鉄製品

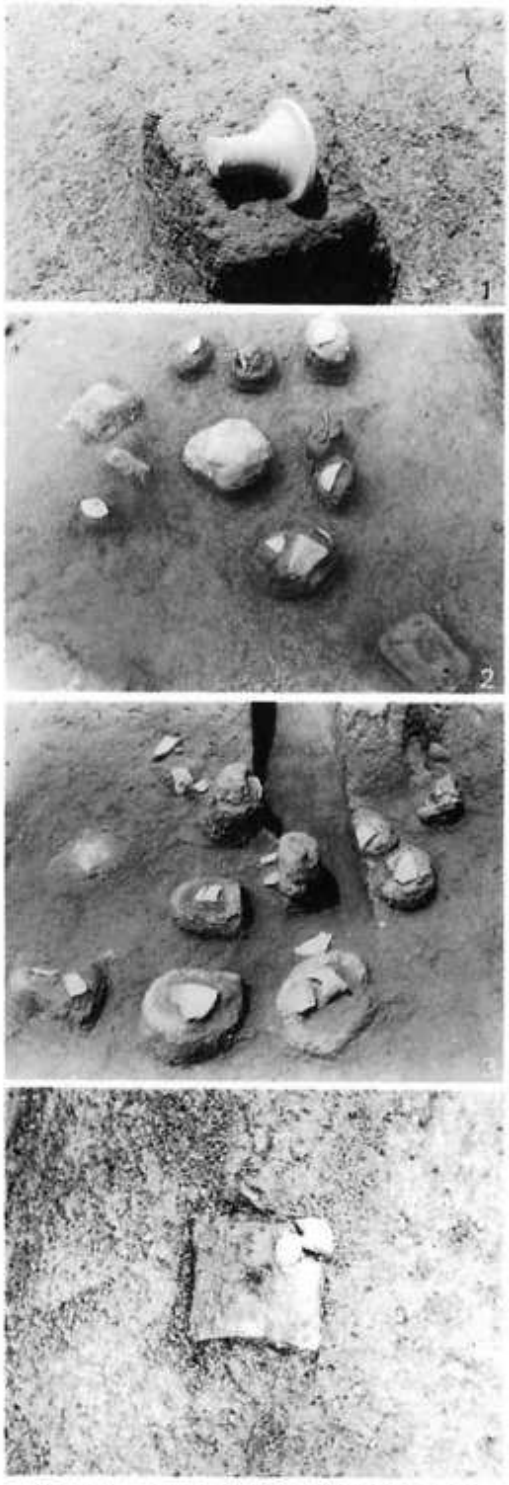
鉄製品（第39図6～17）は，鐔・鉄刀・鉄釘・用途不明品に分けられる。鐔（6）は，¾程度が残存しており，長径約5cm,厚さ1.5mmで，断面形は内側縁が尖る長三角形である。茎孔の大きさは，長径約3cmと考えられる。鉄刀（9）は，奥壁に接するようにして出土したもので，全長33.8cm，刃部幅2.5cm，刃部背厚0.8cm，茎部幅1.45cm，茎部背厚0.6cmである。銹化が顕著であり，また全体に若干の反りがみられる。茎部寄りの刃部に損耗が認められ，また切先の形状も不明である。目釘孔は認められない。刃部側にゆるやかな関が付く片関のものである。鉄釘（10～12・14～17）は，釘頭が明確なものはみられない。長さは，現存規模で最大のものが11の8.2cmである。7・8・13は用途不明のもので，うすい鉄板状の7，刀子状の8，扁平な鉄釘状の13に分れる。

b．周溝内出土遺物（第42～47図）

第5号古墳背後の周溝西南端を中心に，須恵器・鉄製品がややまとまって出土している。

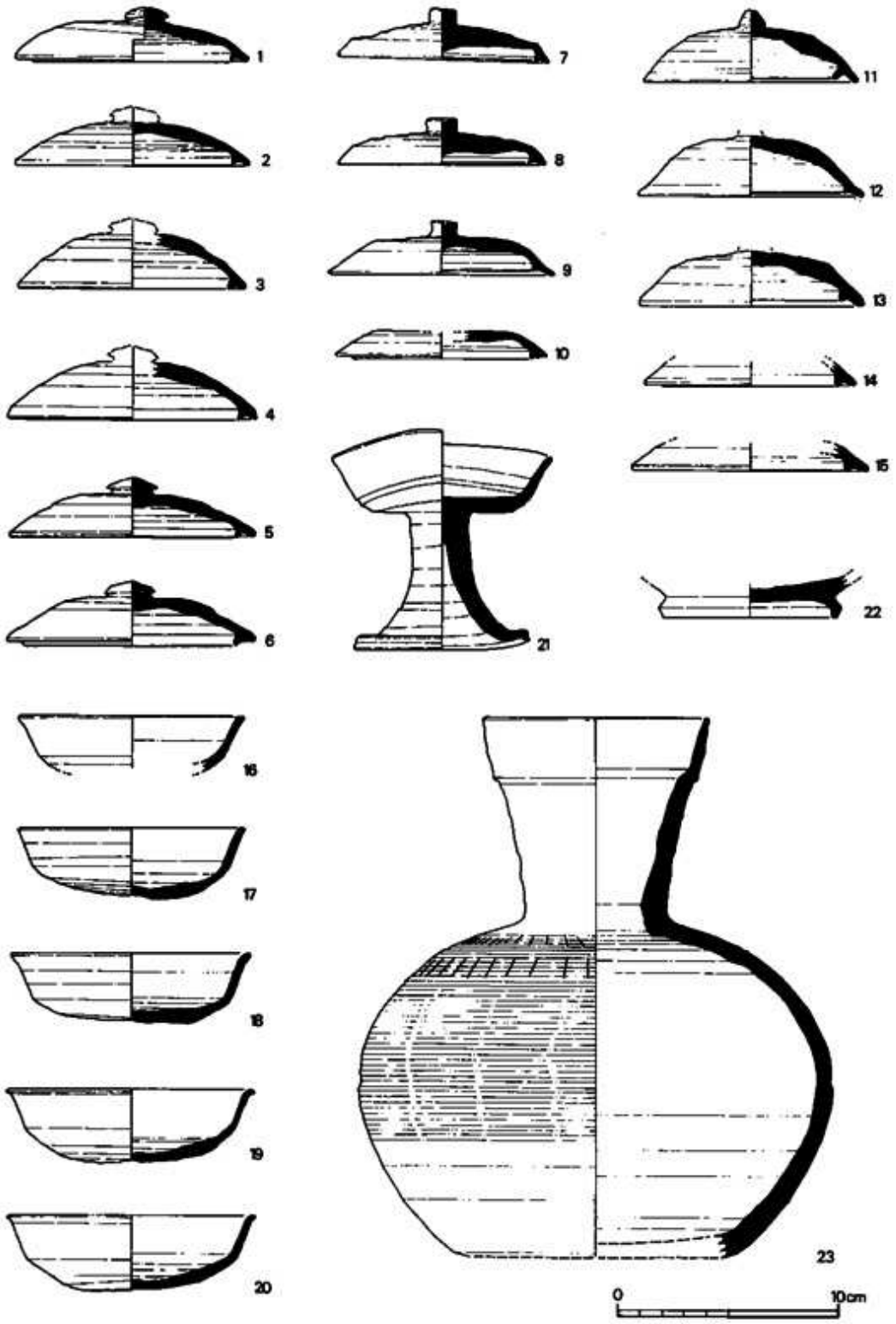
須恵器（第42図1～23）は，計23個体あり，器種の内訳は，杯蓋15，杯身5，高杯1，長頸壺1，高台片1である。

1～15は杯蓋である。10・14・15など小破片のため推定の域を出ないものもあるが，大半はつまみが付く，径の小さい形態のものである。つまみの形態に3タイプあり，これを主たる基準にしてA～C類に分類する。A類（1～6）：扁平な擬宝珠状のつまみが付くもので，径10.3～11.3cm（平均10.8cm），器

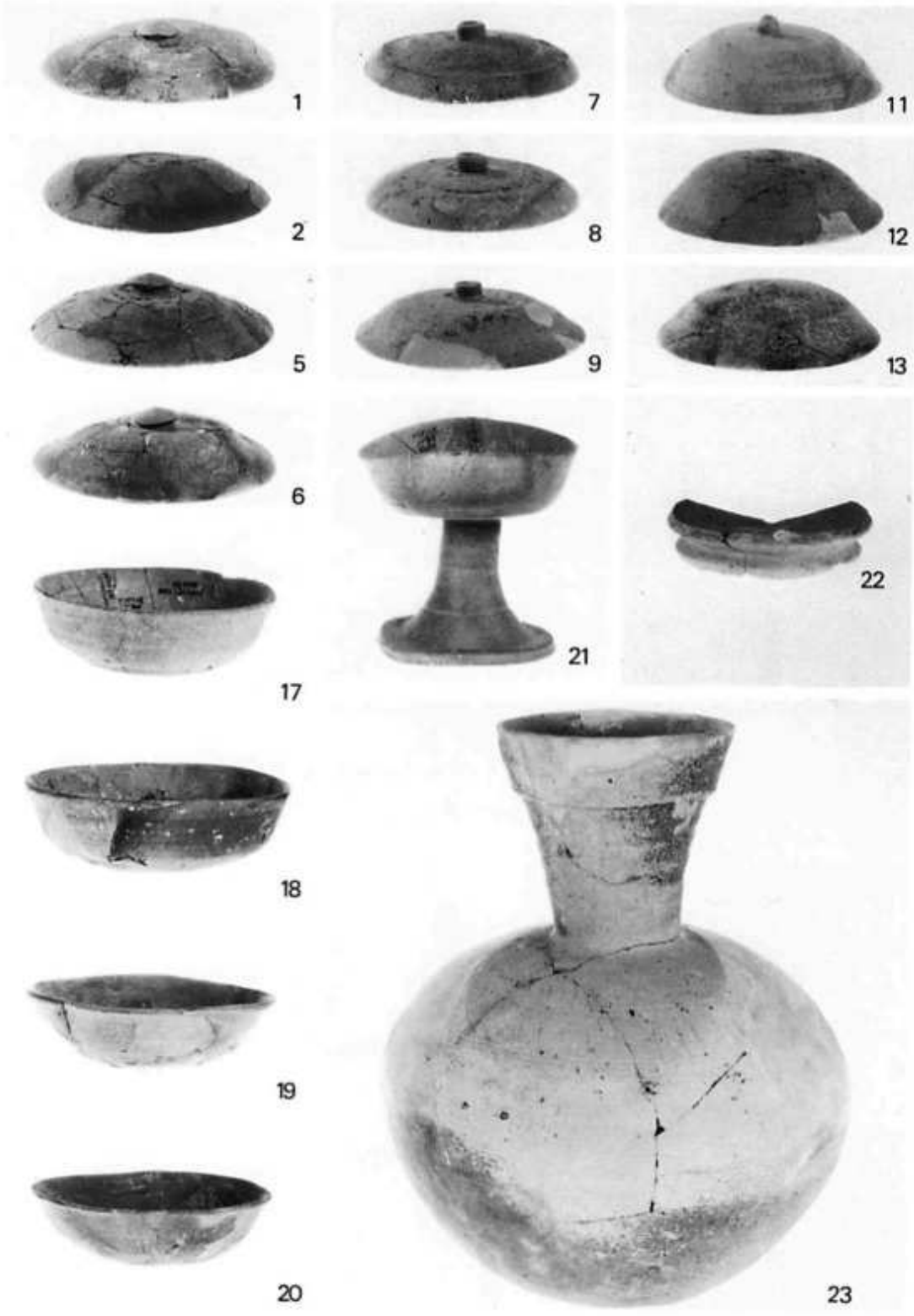


第41図　第5号古墳周溝内遺物出土状況（1～3．須恵器　4．鉄製品）

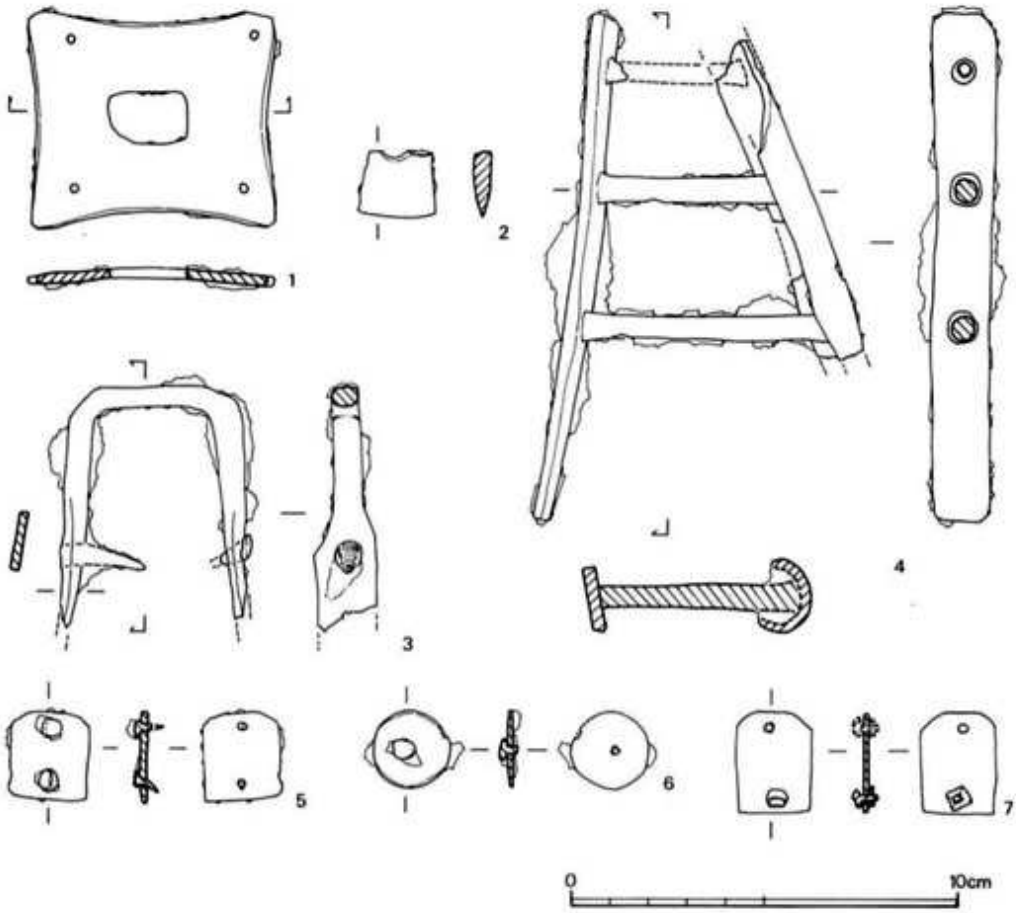
高2.5～2.9cm（平均2.7cm）のやや大型のものである。受け部は短く，6を除いて口縁端とほぼ同じ位置にある。B・C類に比べ，胎土は砂粒をやや多く含み，色調は器表面が暗灰～暗青灰色で，断面は淡褐色である。B類（7～9）：頂部が若干凹む小さな鈕状のつまみをもつもので，径9.4～10.2cm（平均9.7 cm），器高2.1～2.45cm（平均2.3cm）の小型品である。受け部はごく短く，口縁端部より若干内側に入る。天井部が平坦で，口縁部への屈曲の度合いが著しい。また，7・8は天井部中央の厚さが極めて厚いのが特徴である。胎土精緻，焼成も非常に良好で，色調は器表面・断面とも淡明灰～淡灰色で全体に白っぽい。C類（11～13）：円錐形の小さなつまみが付くもので，径9.7 ～10.2cm（平均10cm），器高は11のみ判明しており，3.25cmだが，12・13ともに器高はやや高い。受け部はいずれも短く，口縁端部より若干内側に入る。胎土精緻，焼成はややあまいがほぼ良好で，色調は11・12が器表面・断面ともに淡灰～明灰色，13は暗青灰色である。C類は全体に器壁がやや厚手で器高が高く，口径もやや大きいものの，B類との類似点が多い。16～20は杯身である。やや丸味をおびた平坦な底部から外上方に直線的に立ちあがり，口縁端部が若干外側に屈曲する形態のもので，口径10.2～11.2cm（平均10.7cm），器高3.15～3.4 cm（平均3.3 cm）である。色調は器表面が暗灰～暗青灰色で，断面は淡褐色である。胎土は砂粒を比較的多く含む。色調・胎土・焼成などA類の杯蓋と酷似しており，これらの杯身がA類の杯蓋とセット関係にあることを示唆する。高杯（21）は，全体に歪みがみられるものの，口径8.1×9.9cm，器高8.65～9.8 cm，脚端径7.9 cm，脚高6.15cmである。色調は暗青灰色で，胎土は精良，焼成は良好である。細い脚基部からラッパ状に開き，端部付近でやや強く水平に近く屈曲し、脚端部で短く屈曲して垂下し，端部を丸くおさめる。杯部は，平坦な底部から若干外湾気味に外上方に直線的に立ちあがり，口縁端部を丸くおさめる。調整は全体に丁寧な回転ナデを施す。脚柱部にごく浅い沈線2条を施す。杯部の底部と体部の境界付近に一部ヘラケズリを施す。22は高台片で、高台径7.9 cmである。台付長頸壺の底部片かと考えられる。色調は淡灰～灰白色で，胎土は比較的精良だが軟質で，焼成はやや不良である。23は長頸壺である。底部は不明確だが平底と考えられる。やや扁球状だが大きく膨らむ胴部からつよくくびれて，頸部から外上方に直線的に立ちあがり，口縁部近くで段をなして口縁部につづく。口縁端部はすぼまり気味で，若干丸味をおびるもののほぼ平坦である。調整は内外面ともに基本的に回転ナデを施す。胴部外面上半にカキ目を多く施し（5条／cm程度），肩部には2条の幅広の浅い沈線で画された中に斜位の刻み目を施している。カキ目の下位に一部ヘラケズリを施す。口径10.2cm，器高14.2cm，胴部最大径21.3cmである。色調は器表面が淡灰～暗灰色で，断面は淡灰～白褐色である。胎土は



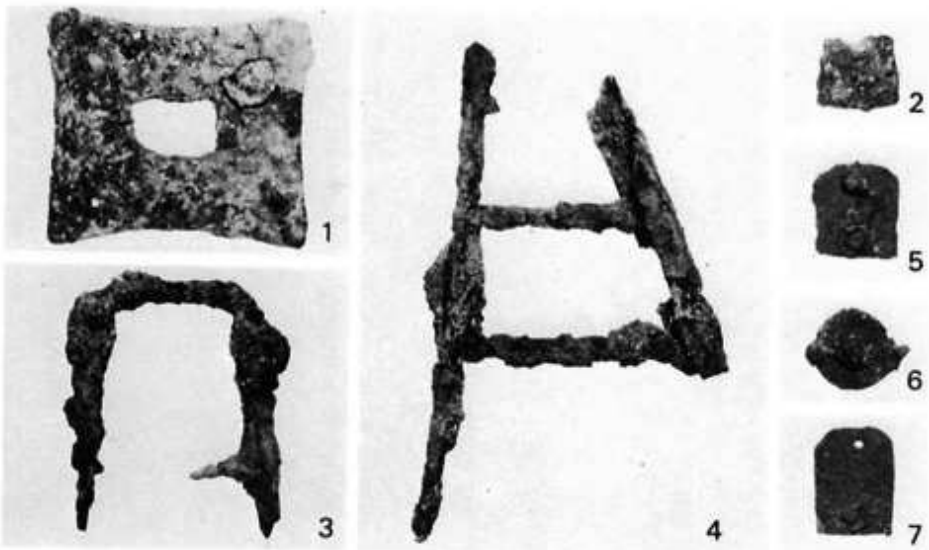
第42図　第５号古墳出土遺物実測図（３）（１：３）（周溝内）須恵器



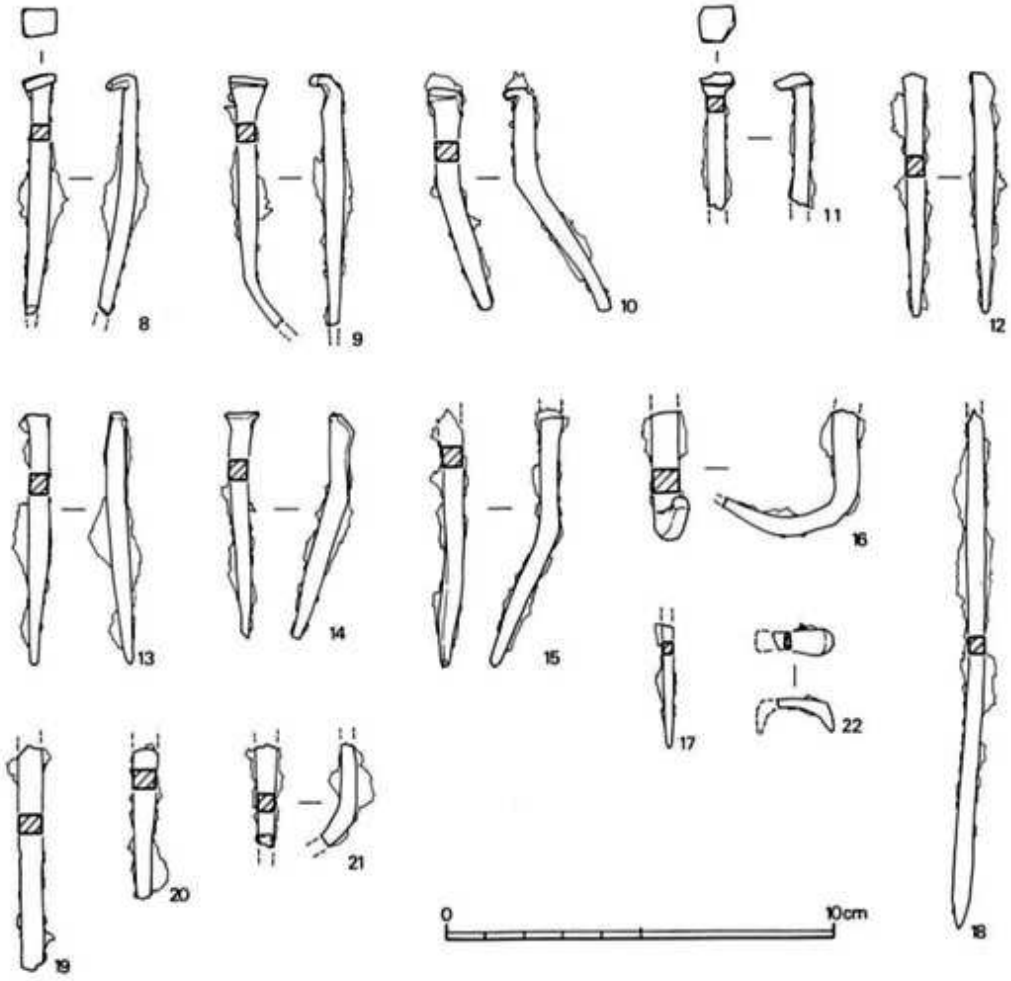
第43図　第５号古墳出土遺物（周溝内）須恵器



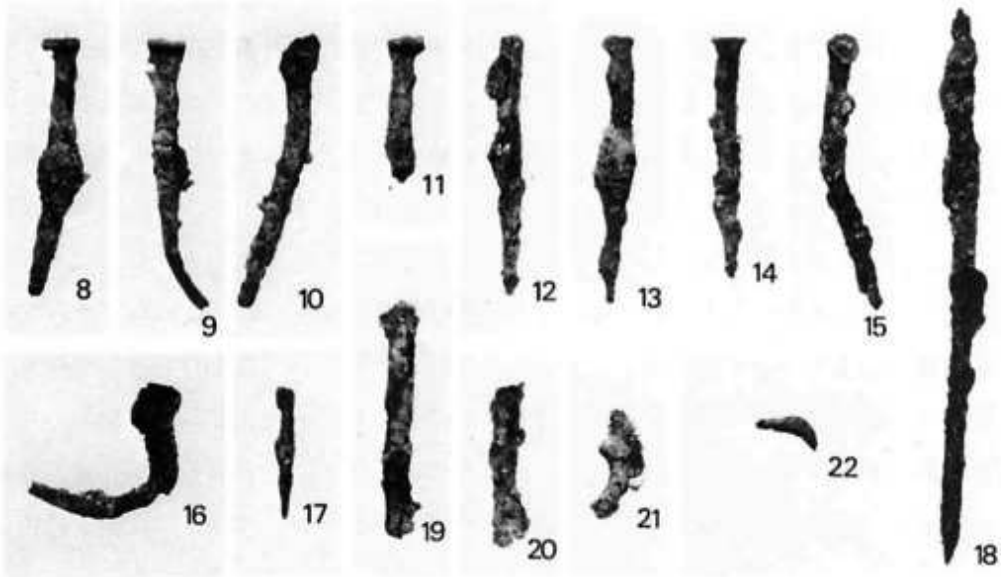
第44図　第５号古墳出土遺物実測図（４）（１：２）（周溝内）鉄製品



第45図　第５号古墳出土遺物（周溝内）鉄製品



第46図　第５号古墳出土遺物実測図（５）（１：２）（周溝内）鉄製品



第47図　第５号古墳出土遺物（周溝内）鉄製品

精良で，焼成は良好である。

鉄製品は，大きく馬具類，用途不明品（第44図１～７）と鉄釘・鎹（第46図８～21）にわけられる。１は，5.45×6.35cm，厚さ３mmの用途不明品である。四辺はいずれもゆるく内湾しており，中央には不整長方形の大きな透しがみられる。また，四隅には径２mm大の穿孔がおこなわれている。２は刀子状の鉄製品の残片である。３～７はいずれも馬具の断片と考えられるものである。３は鐙の上部金具で現存長6.1cm，現存幅4.8cmで，下半を欠失する。残存部分の上半は断面が方形に近い円形，下半は幅1.6 cmの板状になり，この板状部分に鋲が存在する。４は３に一見類似するが，鐙の上部金具としての類例を知らない。長さ13cmで，横方向に３本の断面円形の棒をわたしており，梯状である。左側は幅1.5 cmの細長い板状で，右側は径1.8cmの断面半円形である。５・７は二隅が隅丸の長方形の金具で，辻金具の脚かと考えられる。いずれも２個所に鋲を打っている。５は2.2×2.05cm，７は2.6×1.95cmで，厚さはいずれも1.5mmである。６は円形の金具片で，その使用部位は不明である。中央に１か所鋲が打たれている。径２cm，厚さ１～1.5mmである。

鉄釘14本，鎹１本が出土している。鉄釘８～21は完形品は少ないが，全体に第２号古墳出土の鉄釘に比べると小型である。完形品４本の長さは，5.75～6.4 cm（平均6.2 cm）である。釘頭の形態としては，Ａ類４点，Ｂ類３点，不明７点で，Ａ類・Ｂ類が同程度の出現頻度を示している。木質の付着は全く認められない。22は鎹と考えられるもので，½強が残存している。現存長1.55cm，幅0.65cmである。

小結

第５号古墳は，主尾根から東南方向に派生した支尾根の尾根線上に立地し，横穴式石室を内部主体とする。石室背後には急斜面を深く掘り込んだ周溝が存在する。掘り方ほぼ中央に構築された石室は，長さ西側壁で4.36m，幅1.30～1.52m，高さ奥壁で1.67mのやや入口側が開く「コ」字形のもので，本古墳群中でも最も整った石を用いて構築された石室である。天井石はすべて欠失しており，基底石及びその上に１～３段分の側壁が残存している。床面に棺台石とみられる板石が存在し，また鉄釘の出土もみられることから，木棺を安置していたものと考えられる。その配置状況や棺の規模などについては分らないが，耳環５個が出土していることから，少くとも３回の埋葬が行われたものとみられる。出土遺物には，須恵器（甕・提瓶・坩蓋・杯身），鉄器（鉄刀・鐔など），耳環があり，これらからみて，第５号古墳の築造年代は，ほぼ６世紀後半を中心とする時期と考えられる。

なお，石室背後の周溝内出土の須恵器・馬具・鉄釘などについては，第４号古墳周溝内出土の馬具とともに，第３号古墳石室からの転落によるものと考えられる。

V. ま　と　め

銭神古墳群は，計５基の横穴式石室を内部主体とする古墳で構成されている。昨年度の第１・３号古墳に続いて，今年度は第２・４・５号古墳の調査を実施し，本古墳群の全容を明らかにすることができた。以下では，主に石室構築法の検討を通して，銭神古墳群の築造順序や年代的位置付けを明らかにしたい。

立地　本古墳群は，沼田川南岸の標高100 m前後の低丘陵ほぼ中央に位置する。この低丘陵の南縁を東流する沼田川支流の天井川に注ぐ一小河川である駒月（こまづき）川の谷頭に臨む，東から西に細長くのびる尾根上に立地する。尾根線上に立地する第１・３・５号古墳と，尾根南斜面に立地する第２・４号古墳に分れる（標高70～80m）。横穴式石室は，ほぼ南方向に開口する第１～４号古墳と，東南方向に開口する第５号古墳があるが，ほぼ南方向の天井川流域にむかって開口している。

周溝　その有無が不明な第２号古墳を除いて，石室の背後に平面半円形あるいは楕円形の溝が存在する。周溝の形態は，第１・３号古墳が幅１mほどのごく浅いもので，第４号古墳のものも，急斜面をカットした平坦面の壁際に幅0.7 mのごく浅い溝を掘り込んでいる。第５号古墳背後の溝はやや特異で，急斜面を大きく掘り込んで作られた平面不整楕円形のやや深い溝である。

石室掘り方　石室掘り方の形状は，いずれもほぼ隅丸長方形である。規模は，石室の規模に対応しており，最も小型の第４号古墳が長さ3.8m，幅1.9m，最も大型の第５号古墳が長さ5.94m，幅4.94mで，第１～３号古墳が長さ５m強，幅3.4～4m程度である。また，石室が掘り方のどの位置に構築されているかという点についてみれば，第１・２号古墳が掘り方の東辺に寄せて，第３号古墳はやや西辺に寄せて構築されている。第４・５号古墳は石室掘り方のほぼ中央に石室を構築している。なお，第４号古墳は，他の４基の古墳が掘り方にかなり余白を残して石室を構築しているのに対し，掘り方の広さいっぱいに石室が構築されている。

石室　前述のように，第１～５号古墳はすべて，内部主体は花崗岩質の山石を用いて構築された横穴式石室である。いずれの石室も石材の残存状況は良好ではない。天井石はすべて欠失するか原位置を動いており，側壁も入口側の石材の多くは失っている。現状では，奥壁・両側壁の基底石とこの基底石上に１～３段分の石積みが残存しているにすぎない。

石室の現存規模は，第４号古墳が長さ３m強，幅0.85mと最も小規模である。第１・２号古墳は，長さ3.8～3.9m，幅1.1m程度とほぼ同一規模の石室である。第３号古墳の石

室は，長さ4.8m と最も長大であるが，幅については1.1m で第１・２号古墳と同程度である。第５号古墳は，長さ4.31m であるが，幅1.3～1.52m と最も広い。

次に，石室の構築の方法についてみよう。いずれの古墳の石室も，奥壁・両側壁とも基底石及び基底石上１～３段の石積みが残っている。多くの場合，石室入口側は基底石のみが残り，基底石上の石積みは奥壁及び両側壁の奥壁側で良好な残存状況を示している。そして，これらの石材の積み方については，一定の規則性が認められるようである。即ち，基本的には基底石は石を横長あるいは縦長に立てる広口積みで，基底石上の石材については石の小口面を石室の内側に向ける小口積み・横積みによっている。但し，もう少し詳細にみていくと，基底石を広口積みする場合でも，石を縦長に立てるか横長に立てるか，あるいは，基底石はすべて広口積みしているわけではなく，石室の入口側の側壁の基底石は，かなりの頻度で小型の石を小口積み・横積みしている。また，基底石上の石積みも，小口積みと横積みとがある。なお，銭神古墳群の横穴式石室は，第５号古墳を除き，概して整った形の石を用いていない。また，石積みの仕方もやや乱雑である。よって，基底石上の石積みは，石の間に生じた間隙に10～30cm大の石を充填している例が比較的多くみられる。以下，古墳毎に石室の構築法についてやや詳しくみていくことにする。なお，記述をすすめやすくするために，便宜上，広口積みをＡ，小口積みをＢ，また横積みをＣとし，石を横長に立てる広口積みをＡ１，縦長に立てる広口積みをＡ２とする。

第１号古墳……基底石については，奥壁と最奥部の両側壁がいずれも広口積みで，奥壁がＡ２，両側壁がいずれもＡ１である。最奥部以外の両側壁の基底石は，基本的に横積みである（Ｃ。東側壁入口側の基底石欠失。）。また，基底石上の石積みは，西側壁（３段）・奥壁（２段）が基本的にＣ，東側壁（２段）はＢ＋Ｃで，いずれも基本的に小口積み・横積みである。なお，両側壁において，小角礫の充填がみられ，石積みの仕方も全体的に乱雑である。

第２号古墳……基底石は，西側壁最奥部，奥壁，東側壁（奥壁側２枚。入口側は欠失）は広口積みで，両側壁はＡ１，奥壁は左に細長い石，右に正方形に近い石を立てている。東側壁入口側の基底石については不明だが，西側壁入口側の４個の基底石はすべて不整形の石を小口積み・横積みしたものである。基底石上の石積みは１段分のみ残存する。西側壁はＢ，奥壁・東側壁はＣである。

第３号古墳……基底石は，西側壁の奥壁側３個及び東側壁の奥壁側２個がＡ１，奥壁２個と西側壁の奥から４番目までの基底石はＡ２で，いずれも広口積みである。これに対して，西側壁の入口側３個の基底石は小型の石を小口積み・横積みしている。基底石の石積みに

ついては，西側壁の１段目はＣ，２段目はＢである。奥壁は，基底石上に基底石と同規模の石を広口積みしており，やや特異である。なお，西側壁では，石材間に小角礫を一部充填している。

第４号古墳……基底石については，両側壁の最奥部の基底石と奥壁の基底石が広口積みで、特に奥壁と東側壁は横長に石を立てている。これに対して，西側壁の奥から２～６番目の基底石と東側壁の奥から２番目（入口側の基底石は欠失）までの基底石は小口積みである。基底石上の石積みについては，小口積み・横積みであるがあまり規則性はなく，やや積み方が乱雑である。

第５号古墳……基底石は，奥壁・両側壁すべて広口積みで，小口積みはみられない。奥壁はいずれもＡ２，両側壁はすべてＡ１である。基底石上の石積みについては，奥壁（３段）・西側壁（３段）は基本的にＣ，東側壁（３段）は一部Ｃが混在するが基本的にＢである。なお，奥壁・両側壁とも２段目に小角礫による充填が認められる。

最後に，以上の石室構築上の諸特徴や出土遺物などの比較検討を通して，銭神古墳群の築造順序・年代的位置付けに言及したい。先ず，各古墳の出土遺物についてみれば，第３号古墳・第５号古墳ではある程度まとまって須恵器が出土しており，古墳築造の年代をおさえることができる。即ち，第３号古墳が７世紀前半～中頃，第５号古墳は６世紀後半といった年代をそれ程出ることはないだろう。しかし，第１号古墳・第２号古墳・第４号古墳は，古墳築造時期の決定に充分な遺物の出土をみていない。それでも，土師器甕を出土した第１号古墳，須恵器甕・土師器杯を出土した第２号古墳については，大略７世紀代といった年代を与えることができると考えるが，鉄釘のみを出土した第４号古墳についてはその古墳築造の時期を知る手懸りは皆無に等しい。以上，出土遺物からみて，本古墳群で最初に築造された古墳は第５号古墳であり，その時期は６世紀後半である。次いで，第３号古墳・第１号古墳・第２号古墳が７世紀代に相次いで築造されたのではないかと考えられる。次に，石室構築上の諸特徴からみれば，　１）石室の規模の点では，第５号古墳が最大，第１～３号古墳が中規模，第４号古墳は最小である。　２）石積みの仕方では，基底石がすべて広口積みの第５号古墳，奥壁及び奥壁側１～２個の両側壁が広口積みで入口側の両側壁の基底石が小口積みの第１・２・４号古墳，後者に近いが西側壁の奥側４個までが広口積みの第３号古墳となる。即ち，第５号古墳と第１・２・４号古墳に分れ，後者に近いが中間的形態として第３号古墳が位置する。　３）基底石上の石積みについては，基本的に小口積み・横積みの点では同一であるが，第１号古墳・第５号古墳が奥壁・西側壁は基本的に横積みであるのに対し，東側壁は横積みを含むものの，基本的には小口積み

である。第２～４号古墳は，横積みと小口積みを併用しており，これといった規則性はみられない。

以上からみると，必ずしも明確に分れるわけではないが，第５号古墳と第１～４号古墳とにある程度の差違を認めることはできよう。

以上から，銭神古墳群は，６世紀後半に第５号古墳が築造されたのにはじまり，次いで７世紀代に第１・２・３号古墳が築造されたと考えられる。第４号古墳については，石室規模が古墳群中最小で，石室の構築の仕方も他の古墳に比べやや乱雑であること，また尾根基部の崖面に接する急斜面に築造されている，などかなりの制約をうけており，８世紀代に下るかどうかは別にして，本古墳群中最後に築造されたと考える方が妥当であろう。

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第59集

銭神（ぜにがみ）第2・4・5号古墳発掘調査報告書

発　行　日
昭　和　62（1987）年　3　月

編集・発行
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島市西区観音新町4丁目8-49
TEL(082)295−5751

印　刷　所　中本総合印刷株式会社